

西山 1・2号墳出土遺物の再検討

桐井理揮・北山大熙・菊池 望・繰納民之

1 はじめに

西山古墳群は京都府城陽市久世大谷に位置する、7基からなる古墳群である（第1図）。

現在、1号墳、2号墳出土遺物が同志社大学歴史資料館に保管されている。今回、筆者らが遺物を観察する機会を得て調査を行ったところ、これまで知られていた金属器類の他に、土器・埴輪が存在することが明らかになった。

これまで『城陽市史』（小泉ほか1999）や、春日宇光による再検討（春日2013）を経て、金属器等一部の遺物に関しては詳細が明らかとなっており、前期後半でも新しい段階に位置づけられてきたが（和田1988、石崎編2015）、土器類は古墳時代前期前半の様相を呈していることが新たに判明した。さらに、久津川古墳群久世支群では、埴輪・葺石の出現は中期の大型古墳出現を待たねばならないとされてきたが、今回前期古墳にも埴輪が伴うことが明らかとなり、これまでの理解を改める必要が生じた。したがって、久津川古墳群の従前の編年観やその性格にも一石を投じる資料であると考えられた。

その重要性に鑑み、今回新たに存在が明らかとなった土器・埴輪類を図化するとともに、これまで保存状態が芳しくなかったため等閑視されてきた一部の金属器類の図化を行った。また、一部の遺物に関しては、再検討の上、再実測を行ったものもある¹⁾。執筆はそれぞれが協議のうえ行い、文責を末尾に示した。全体の取りまとめは桐井が行った。（桐井）



第1図 西山古墳群位置図（1／5,000）（右図は小泉ほか1999）

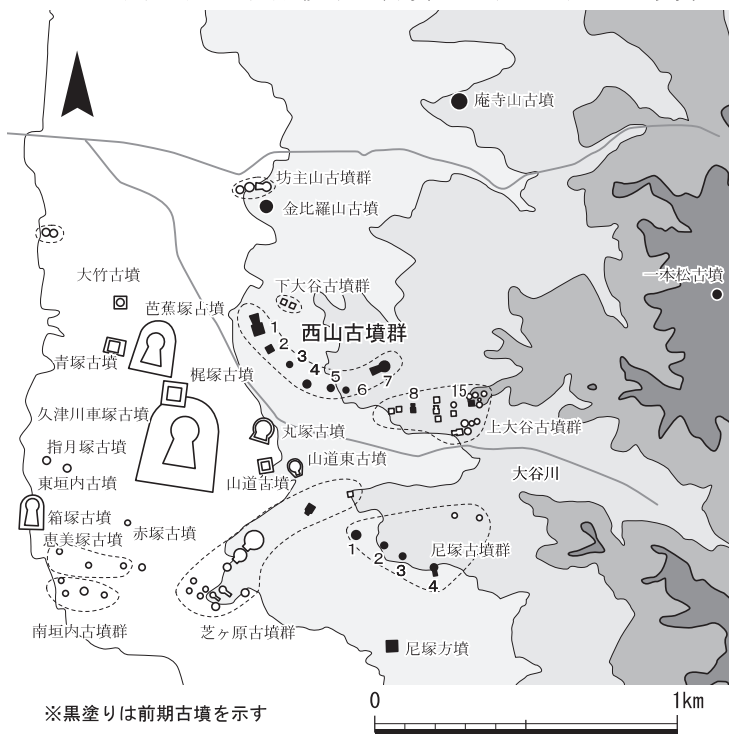
2 西山古墳群の概略

西山古墳群の発掘調査 西山古墳群の調査の経緯については、『城陽市史』に詳しく纏められているため（小泉ほか1999）、本論ではその概略のみを確認しておこう。

西山古墳群は京都府城陽市の北東端にあり、北西へと延びる丘陵稜線に沿って並ぶ古墳群である（第2図）。北西から、1号墳（前方後円墳、82m）、2号墳（方墳、1辺25～27m）、3号墳（円墳）、4号墳（円墳、25m）、5号墳（円墳、18m）、6号墳（円墳）、7号墳（前方後円墳、55m?）と名付けられている。1961年に同志社大学考古学研究会による分布調査で前方後方墳1基（1号墳）と円墳9基が存在する古墳として報告され認識されるようになった（同志社大学考古学研究会1962）。なお、いずれの古墳にも葺石・埴輪は存在しないと報告された。

同年、西山古墳群を含む丘陵上で宅地造成の計画が持ち上がったが、協議の結果、7号墳は保存され²⁾、すでに工事によって破壊された3・6号墳を除いた古墳について、記録保存のための発掘調査が行われることとなった。発掘調査の成果はそれぞれの古墳の担当者によって概要が報告されている（京都大学考古学研究会1961、堅田・白石1962、堤1964、小泉ほか1999）。

研究史上の位置付け しかし、『城陽市史』以前は古墳の全体像が不明確であったことや、出土遺物の十分な検討が行われていなかったことから、当初の「前期後半」の古墳群という評価がほぼ定説化している。埋葬施設が特異な粘土槨とされたことも、少なからず影響しているのだろう。宇野隆志は京都府南部の古墳群の動向を整理する中で、西山古墳群や尼塚古墳群など前期後半に中規模の古墳群が展開することを評価し、南山城における古墳築造の二つ目の画期であるとしている（宇野2017）。また、小泉裕司は、前期後半の古墳群の中では西山1号墳が卓越した規模を有しているとして、前期



の久津川古墳群のなかでは盟主的な古墳であると位置付けている（小泉ほか1999）。

このように、西山古墳群は久津川古墳群の動向を考える上では重要な位置を占めるが、その実態は不明瞭なままであった。春日宇光は一部の金属器を再検討する中で、鉄製農工具類がこれまでの評価よりも時期が遡る可能性を指摘している（春日2013）。桐井も、久津川古墳群最古とされてきた宇治市一本松古墳を集成編年3期後半と評価した上で、埴輪も葺石も持たない西山古墳群との前後関係については再検討を要することを指摘した（桐井2019）。

第2図 久津川古墳群と西山古墳群の位置

（桐井）

3 出土遺物の再検討

本稿では、これまで存在が知られていなかった土器・埴輪類の図化作業を行うとともに、一部の金属器についても、新たな知見が得られたものを中心に再実測・再検討を行った。すでに『城陽市史』等で図が提示されているものに関しては、その対応関係が明確になるよう、並記した。

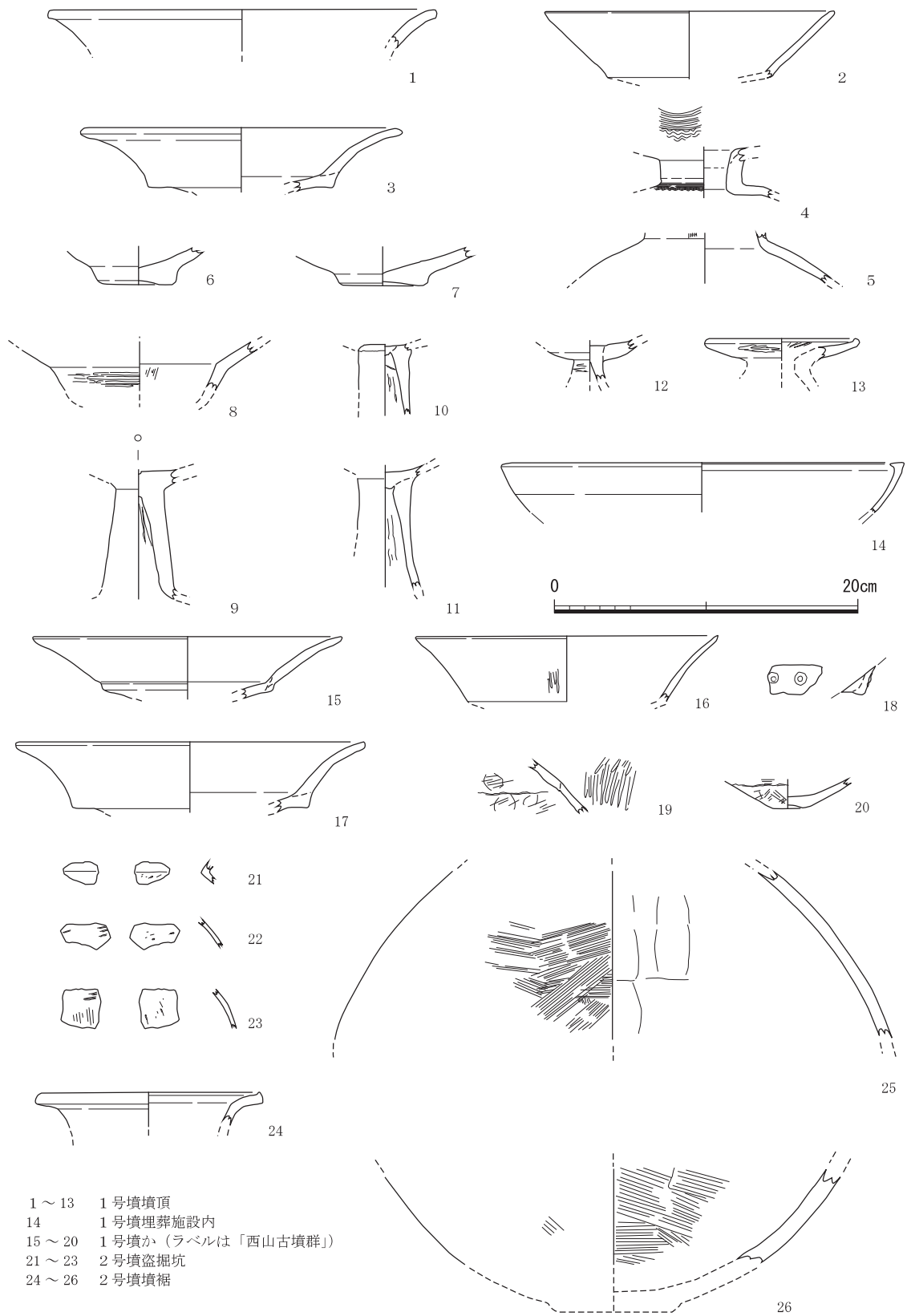
①土器

遺物の概略 土器は城陽市史で高杯が2点（第3図9、11）、壺底部が1点（第3図7）報告されていたが、それ以外にコンテナ1箱分が保管されている。遺物ラベルから、多くは1号墳に帰属するものである。1号墳は「墳上A（B、N）トレンチ」「A2B2トレンチ」「後方部NWトレンチ」「SW区攪乱」などの記述が混在しているが、「NW」「SW」は後方部、「A」「B」は前方部に設定されたトレンチと推測でき、大まかな出土位置の推測が可能である。また、単に「西山古墳群1961」とのみ記されたラベルもあるが、これらは1号墳と共通する胎土・器形をもつものが多く、1号墳に伴うものと推測するが、詳細は不明である。2号墳とされるラベルには、「盗掘坑」、「掘方」および「旧表土下墳スソ」があり、墳丘上の土器は残されていない。

1～14は1号墳に伴う土器である。1は単純口縁を持つ広口壺である。2、3は二重口縁壺の二次口縁部、あるいは高杯の杯部であろうか。口縁端部は単純に丸く収める。4は緻密な胎土を持つ二重口縁壺の頸部である。肩部には櫛描波状文・直線文が1帯ずつ認められる。5は二重口縁壺頸部か。6はV様式系壺の底部である。胎土は黄色系胎土でチャートやシャモットを多量に含む。7もV様式系の壺底部であり石英・長石を多く含む。8、9は庄内系有段口縁高杯である。8はほぼ砂粒を含まない精良な胎土をもち、内外面は緻密なミガキが施されている。屈曲が不明瞭で器壁がやや厚い。9も8と同様の胎土で、外面はミガキ、内面には絞り痕が明瞭に残る。杯部内面には径4mm程の刺突痕が認められる。10、11はV様式系の有稜高杯の脚部である。内面頂部には円盤充填の痕跡が残る。胎土は白色系で、やや大粒の石英・長石を含む。12は碗形高杯の脚部と考えられる。赤色系の精良な胎土で製作されており、脚部と杯部の接合は挿入付加法による。13は小形器台口縁部か。内外面ミガキを施し、口縁部端はやや肥厚させる。精良な胎土に細かな黒色粒をわずかに含む。14は粘土礫内出土土器である。やや広い端面を持つ高杯の杯部であろうか。弥生時代中期の混入の可能性もある。

15～20はどちらの古墳に伴うものか判断できなかったが、1号墳と胎土が共通するものが多い。15～17は二重口縁壺の口縁部である。15は精良な胎土で橙色の塗布が認められる。内外面は細ミガキが施される。16、17は黄色系胎土で石英・長石を多く含む。V様式系の二重口縁壺か。18は加飾壺の口縁部である。内面は剥離痕跡があり、垂下口縁を持つ加飾壺等が復元の候補となろう。19は壺体部片である。外面は丁寧なミガキが施され、内面は指頭圧痕を顕著に残す。20は凹み底の甕底部であり、1mm以下の細かい砂粒を大量に含む。外面は黒色、内面は薄灰色に焼成されており、同様の焼き上がりの土器はほかにない。受口状口縁甕の底部と考える。

21～26は2号墳出土とされるものである。21～23は墳頂盗掘坑から出土した、生駒山西麓産胎土を持つ庄内河内型甕である。21は頸部付近で、頸部直下までケズリが認められる。22、23は体部であり、それぞれ細筋タタキとハケが認められる。



第3図 西山古墳群実測図 (1 / 4)

24～26は2号墳旧地表下・墳丘裾部から出土した。24は土師器口縁部である。外反する口縁部で端部をややつまみ上げる。砂粒を多く含み、弥生土器である可能性もある。他に似たような胎土を持つ土器はない。25、26は墳丘裾部から出土した大形の土器の破片である。大粒の角閃石、石英・長石を大量に含む。角閃石は角張っており、石英・長石とかみ合った原石のままのものも含まれる。同様の胎土を持つ破片が30破片程あり、中でも比較的大きな破片を選んで任意の傾きで復元を行った。大形の生駒山西麓産（以下「西麓産」）壺と考える。

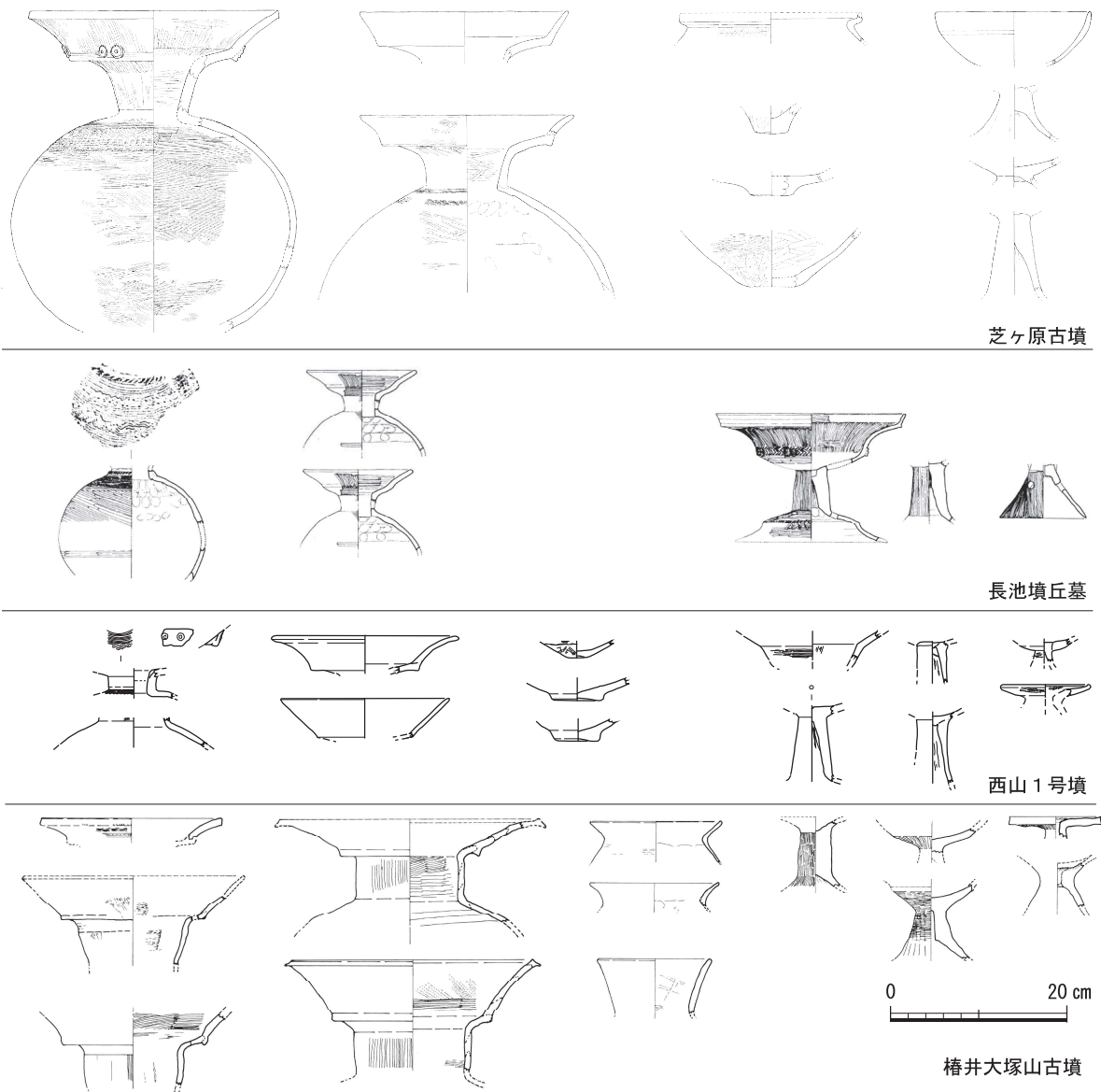
土器群の編年的位置づけ 次にこれらの土器の位置づけを行いたい。1号墳の埋葬施設からは高杯杯部の小片が出土したほか、盗掘坑から土師器片が20片程出土しているが、時期が判明するものはない。古墳に直接伴うと考えられるのは墳丘上から出土した土器である。墳丘上から出土した土器はV様式系、庄内式系の器種が主体をなし、図化した土器のほかに、西麓産土器の破片が11片認められる。すべてが破片資料で明確な時期を確定しがたいという制約はあるものの、高野陽子が示した久御山町佐山遺跡での編年（高野2003、以下、佐山編年）および、中河内の土器編年（西村2008）の中での位置づけを確認していくことにしよう。

壺類は、二重口縁壺と加飾壺が存在する。二重口縁壺は小片がほとんどで、時期の確定が難しいが、1次口縁部と2次口縁部の接合手法は、高野が示した二重口縁壺の分類（高野1996）を参考にすると、粘土帯付加手法（B2・3類）が確認できる一方で擬口縁手法（C類）は含まれず、布留式古段階に中心がある。18の加飾壺も、西村編年では布留式中段階以降には継続しない器種であることとも矛盾しない。甕は出土位置が明らかでない凹み底の底部が1点出土しているのみだが、これは畿内系の器種ではなく受口状口縁土器群として理解しうるものであり、佐山ⅢA-1期、布留式古段階新相を下限とする。高杯は、V様式系高杯の他、杯部に刺突を有する庄内系加飾高杯が2点出土している。庄内系加飾高杯は佐山Ⅱ-4期を主体としつつⅢA-1期まで残存する。

したがって、これらの土器群はおおむね佐山ⅢA-1期までに収まる一群であると評価できる。なお、佐山ⅢA-1期は西村編年では布留式古段階から中段階古相までの時間幅をもつものと考えられる。西山1号墳では布留系の器種が認められなかったが、佐山遺跡の様相から考えると、古墳時代前期前半の土器相とみて問題ない。また、器種構成をみると、集落出土土器に比べて、肩部に施文を持つ壺類や二重口縁壺、高杯の出土が目立つ。このことは、これらの土器群が古墳に伴うものであることの傍証にもなる。 (第4図)。

木津川右岸の前期古墳との前後関係を直接比較することは難しいが、あえて検討するならば、城陽市長池墳丘墓の典型的な庄内系加飾高杯や、同・芝ヶ原古墳の頸部が外傾する加飾壺は庄内式新段階～布留式古段階古相の様相であり、西山1号墳出土土器は後出する要素を備えていると言える。また、二重口縁壺を見ると、木津川市椿井大塚山古墳、西山1号墳ともにB2・3手法で構成され、大きな時期差は想定しがたい。ただし、椿井大塚山古墳の二重口縁壺は2次口縁部が大きく広がる形態で、端部もやや厚ぼったくシャープさを欠く。さらに西山1号墳に加飾壺など庄内系の要素が多く残存することを勘案するならば、西山1号墳出土土器はやや先行する様相とも評価することは可能である。

2号墳出土土器は少ないが、盗掘坑から西麓産庄内形甕が出土している。これらが本来埋葬施設に

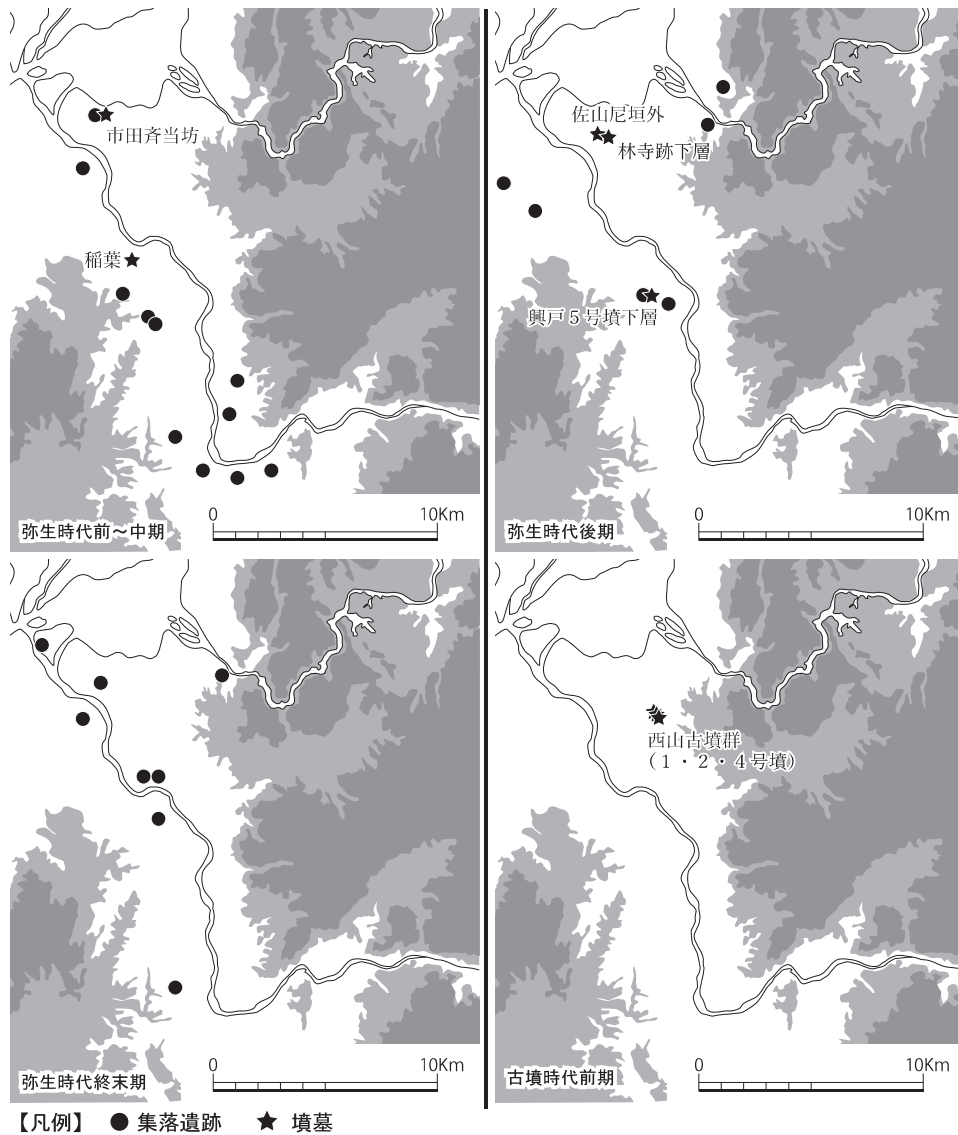


第4図 京都府南部における前期古墳出土土器（1／8）

伴っていたものかは明らかではないが、埋葬施設から庄内形甕が出土した例としては富田林市真名井古墳を挙げることができ、米田敏幸による編年では布留1期＝庄内V期（米田1991）、布留式中段階中相あたりが接点となろう。なお、墳裾からは大形の西麓産壺が出土しているが、体部片のみであり、時期の確定には至らなかった。

以上のように、破片資料ではあるが、1号墳出土土器は布留式古段階新相から中段階古相、2号墳出土土器は布留式中段階古相から中相には収まる資料であるといえよう。

生駒山西麓産土器について 今回の調査で、西麓産土器は、1号墳では墳丘上から不明体部片が十数点、2号墳盗掘坑から庄内形甕片、墳裾から大形の壺体部片が新たに見つかったほか、4号墳埋葬施設から墓壙内に埋置された状態で二重口縁壺が1点出土している。3・6・7号墳は調査前に破壊されてしまったことを勘案すると、本来の数量はさらに増加する可能性はあろう。京都府南部では弥



第5図 京都府南部における生駒山西麓産土器の分布

生時代以降継続して西麓産土器が持ち込まれており、京田辺市稲葉遺跡（弥生時代前期新段階）をはじめ弥生時代の墳墓でも類例は散見する。この傾向は弥生時代を通じて大きく変化はなく、集落・墳墓の分布域は重なっている。弥生時代終末期の墳墓の様相は不明瞭であるが、城陽市下水主遺跡や佐山遺跡など木津川低地部で西麓産胎土の庄内形甕が認められる程度となる。さらに古墳時代になると、集落での出土はなくなり

り、西山古墳群のみとなる。この時期には生産地である生駒山西麓でも量・器種が収斂され、それに伴い周辺地域への搬出量も激減する。京都府南部でも集落への西麓産土器の搬入量は激減する一方で、西山古墳群に集中して分布する様相は、弥生時代までとは異なり、集落の動きとは乖離した動向なのである。

西麓産土器の古墳からの出土例は、先述の真名井古墳や向日市元稲荷古墳など限られた古墳でしかなく、これらの古墳でも、継続的に西麓産土器が持ち込まれた痕跡は見当たらない。西山古墳群では集中的かつ継続的に西麓産土器が持ち込まれていることが特徴であり、当時期の西麓産土器の在り方から考えると、異質な存在である。分布域を提示しただけの素朴な検討であるが、弥生時代までとは異なった交流の背景を垣間見ることができよう。（桐井）

②埴輪

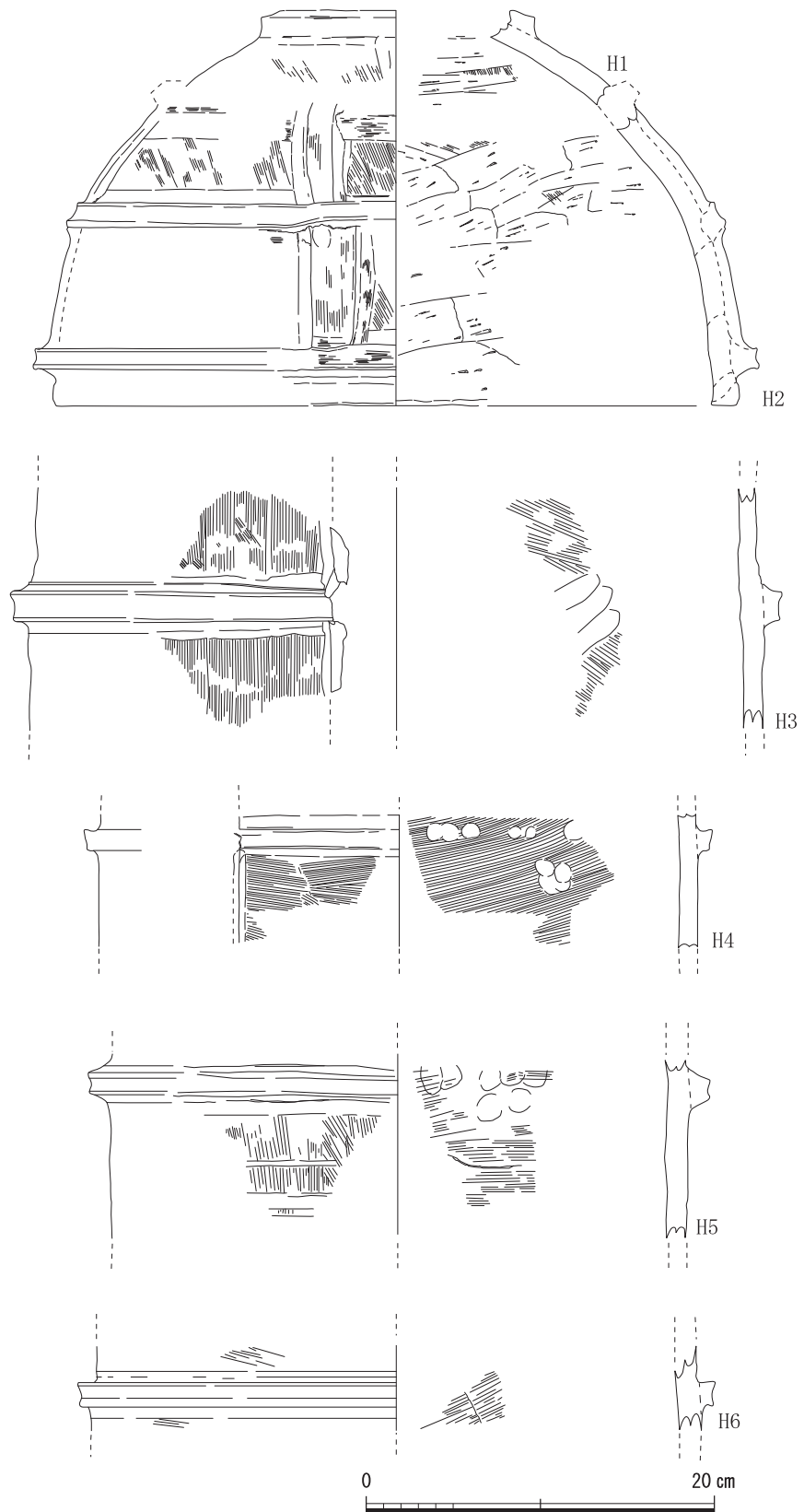
埴輪の出土位置の推定 西山古墳群はこれまでの調査において、各古墳への埴輪の樹立は確認されておらず、調査概報や市史においても調査中に埴輪が出土したことは記載されていない。しかし、『同志社考古』に掲載されている昭和36年の日誌には「4月29日（土）…前方後円墳（1号墳）と思われるものの、真下の南側、精華学園の運動場の敷地のために整地した跡に円筒埴輪片20～30片を採取した。」（同志社考古学研究会1962 p27）と掲載されている。ここでの前方後円墳はのちに前方後方墳と認識された1号墳を指し、精華学園は当時の家政学園、現在の家政城陽幼稚園を誤認したものと考えられる。さらに『同志社考古』の1号墳の概報にて「（測量）調査以前に前方部の北東裾で円筒埴輪棺がブルドーザー工事により出土している」（同志社考古学研究会1962 p37）との記載もある。このように1号墳の墳裾にて円筒埴輪棺が、現・家政城陽幼稚園と思われる地点から円筒埴輪片が採取された状況が掲載されている。

今回、同志社大学資料館にて西山古墳群と記載された箱から円筒棺³⁾の破片と円筒埴輪片を確認することができた。詳細な出土位置等は不明であるが、破片数は20点に満たず、多くが円筒棺となるため、1号墳の北東裾で出土したものの可能性が高い。

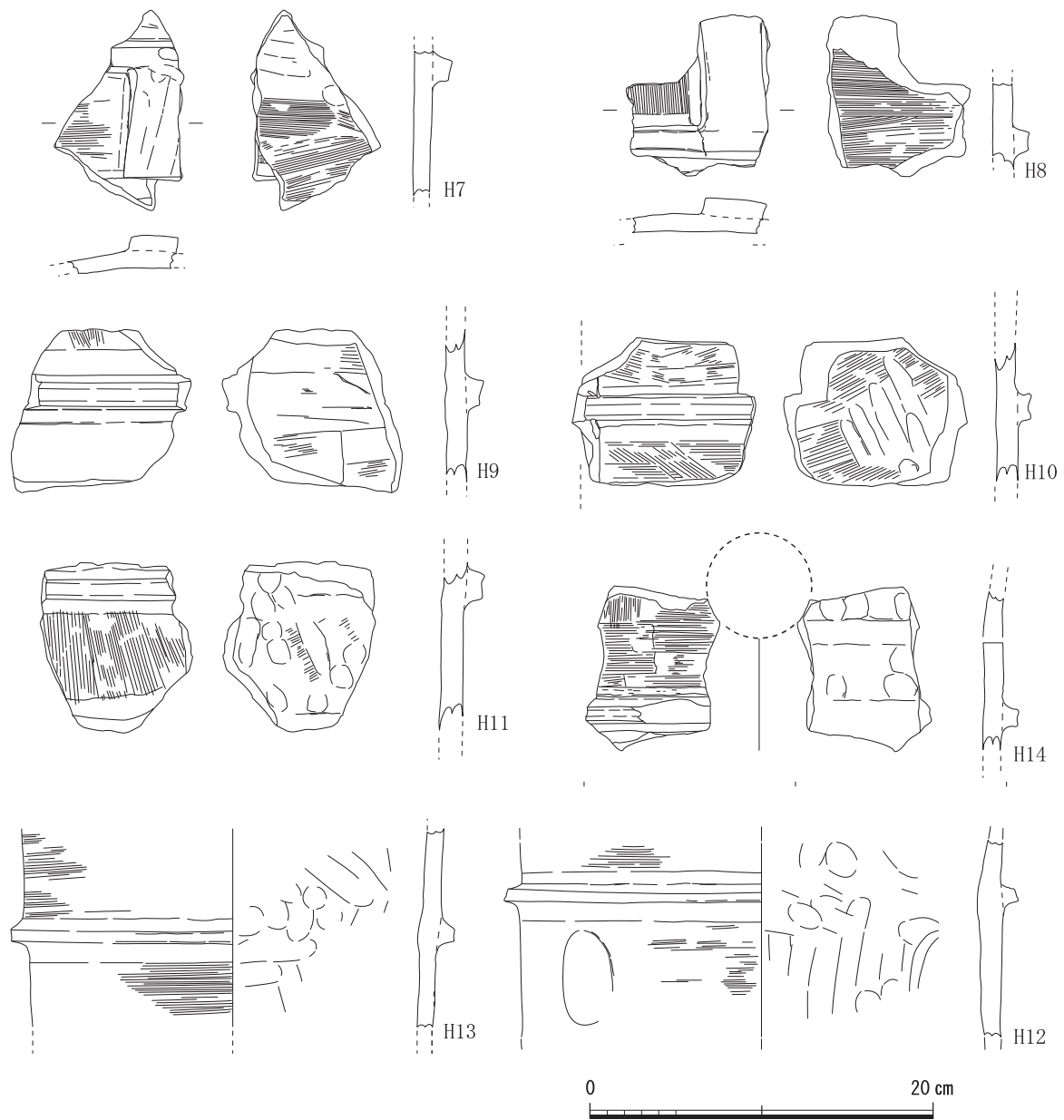
遺物の概略 H1～H11が円筒棺の破片で、円筒棺の蓋と身が確認できる。H1・2が蓋の破片となる。半球形を呈し、外面には4条の突帯を貼り付ける。下から3条の突帯は端部が幅広く、断面M字形になっている。4条目は断面L字形になっている。また、4条の突帯の間に直交するように突帯を貼り付け、格子状突帯となっている。先に4条の突帯を配置し、のちに直交する突帯を間に貼り付けている。最大全長は22.7cm、最大径39.4cmである。外面調整は、摩耗が激しく、不明瞭な点が多いが、突帯貼り付け以前にナナメハケを施し、突帯の上にヨコハケを施す。内面調整は、タテハケを施した後、ケズリを行っている。外面の下端部には、黒斑を有し、赤彩が一部残存している。焼成は、良好である。

H3～11は円筒棺の身の破片である。全体を復元できる資料はなく、全長等は不明であるが、円筒形を呈していたと考えられる。円筒棺についても蓋と同じく、格子状突帯となっている。これらの特異な突帯をもつものと、突帯形態や胎土、色調が同一のものについて円筒棺の身として扱っている。H7・8では蓋と同様に突帯貼り付け後、突帯の間に直交するように突帯を貼り付けていることが確認できる。H3・4では横方向の突帯貼り付け、直交する突帯と重複する部分を切りとり、縦方向に突帯を貼り付けている。H7・8は、最上段か最下段の突帯となり、部位により貼り付け方法が異なる。突帯形態は端部が広く、断面M字形を呈している。外面調整はタテハケ、ヨコハケを施す。内面調整は、ヨコハケを施し、一部ナデ調整とユビオサエが確認できる。焼成はH4・7・8が良好で、それ以外は普通である。直径を復元できたH3～6では、最大径42.2cm～33cmである。最大径の大きさでは、蓋と組み合わないと、端部に向かって径がすぼまっていく形態をしていたものと想定される。

H12・H13は円筒棺の身と突帯形態が異なり、透孔があるため、円筒棺ではなく、円筒埴輪として扱う。今回、確認できた資料は全て体部のものであり、口縁部や底部の破片は認められない。段数な



第6図 西山古墳群出土円筒棺実測図 (1 / 4)

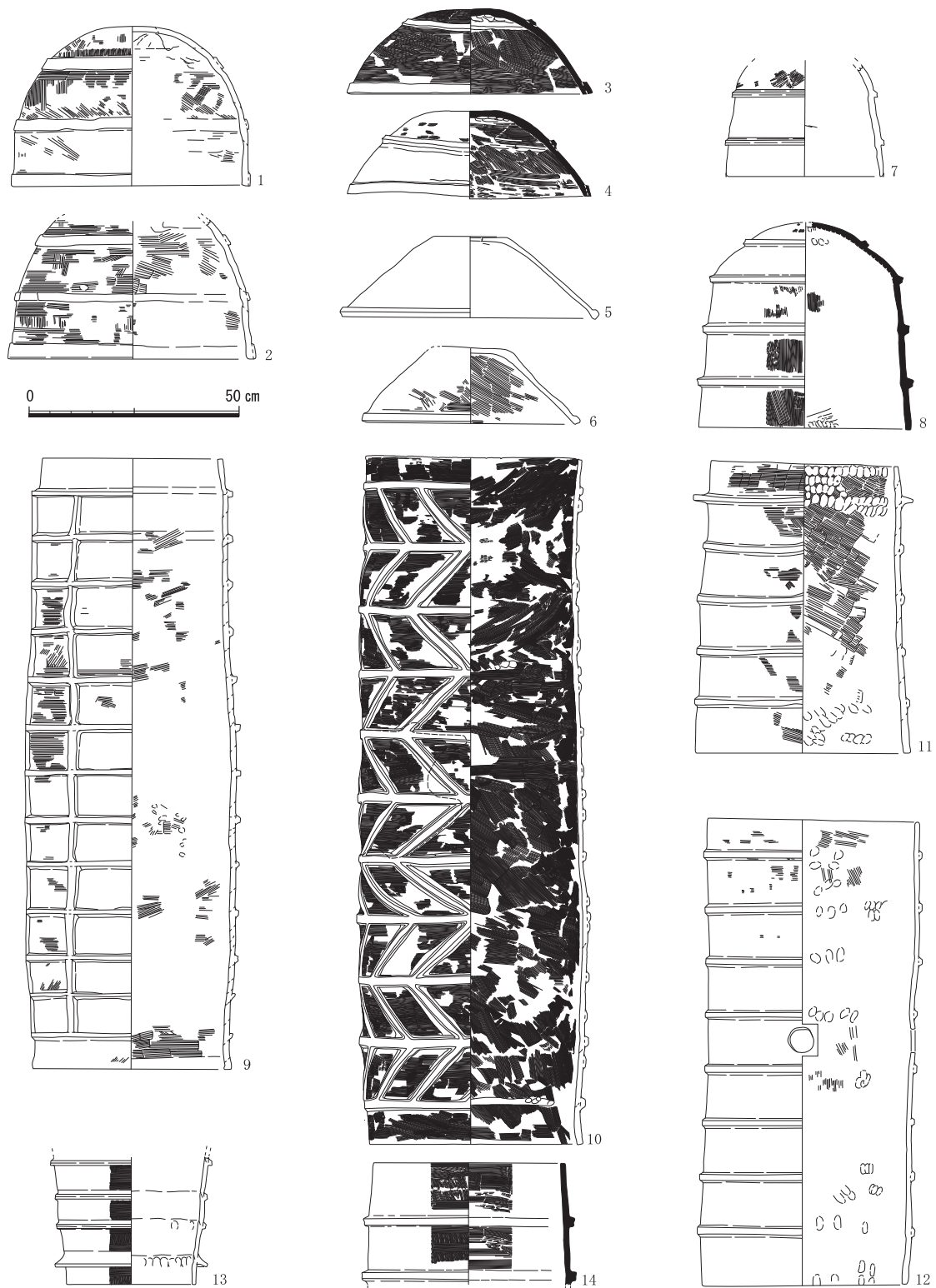


第7図 西山古墳群出土円筒棺・円筒埴輪実測図（1／4）

ども不明であり、全体の形態を復元することは困難である。それぞれの突帯は端部が短く、断面M字形を呈する。また、H12とH14では円形の透孔を穿つ。外面調整はタテハケ後、静止痕の認められないヨコハケを施している。内面調整はナデ調整、ユビオサエを施している。また、黒斑を有し、野焼きによる焼成である。

先述したようにこれまで西山古墳群の発掘調査では埴輪の樹立が確認されていない。今回、報告した円筒埴輪についても樹立されていたものではなく、埴輪棺として転用されていた可能性がある。

西山古墳群出土の円筒棺の位置づけ 今回、報告した円筒棺の身は格子状に突帯を貼り付けるもので、橋本博文氏による分類のI類（橋本1980）に該当する。京都府南部では、西山古墳群出土を除く



1・2・9：内田山B1号墳 3・4・10：金毘羅山古墳 5・6・11・12：瓦谷遺跡26号埴輪棺
7・13：狐谷横穴群 8・14：長法寺南原東3号墳

第8図 京都府南部における円筒棺の事例（1／15）

と、5遺跡（木津川市内田山B1号墳、木津川市瓦谷遺跡、宇治市金毘羅山古墳、八幡市狐谷横穴群、長岡京市長法寺南原東3号墳）で円筒棺の検出例がある。

身については、西山古墳群と同類のI類が内田山B1号墳で出土している。内田山B1号墳では玉類が副葬されており、付近で出土している埴輪棺の形態から中期前半として位置づけられている。同様の形態は奈良市なら山2号墳（伊達1961）などで出土しており、既往の研究で、古墳時代中期前半に出現し、中期中頃まで継続することが明らかにされている。また、分布に関しては、地域的な集中もなく点在している状況である（川口2000）。

蓋については突帯の間に縦方向に突帯を貼り付けるものは全国的に少なく、西山古墳群と同様の形態のものは認められない。身の類例として上記で挙げた内田山B1号墳では、特製の蓋で3条の突帯を巡らせるものが出土している。西山古墳群の蓋とは、端部に突帯を貼り付けるなどの共通する部分はあるが、突帯を格子状に貼り付けないなどの差異も認められる。京都府南部では内田山B1号墳のように半球形で突帯を巡らせるものが主流である。突帯が1条のものから4条のものが出土しており、遺跡を超えて、同一の集団によって製作されたと断定できる資料はなく、各遺跡で差異が認められる。

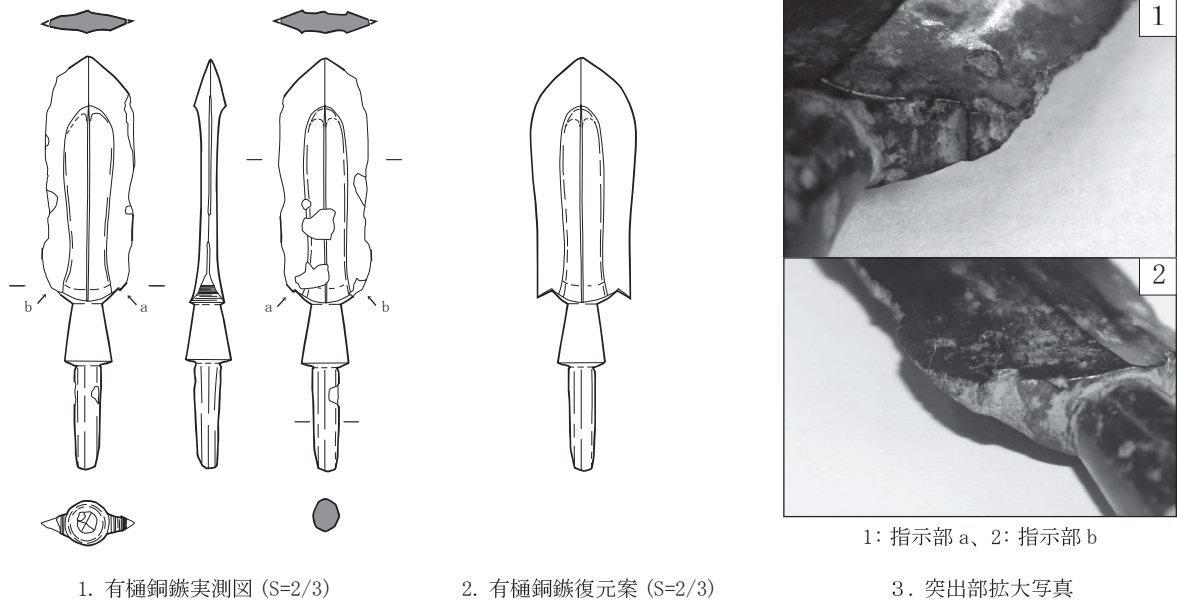
以上、円筒棺の身と蓋について周辺の類例を挙げた。西山古墳群出土の円筒棺は身については内田山B1号墳と同類のものを確認できた。蓋について全体の形態的特徴は内田山B1号墳と類似しているものの、円筒棺の最も大きな特徴といえる突帯について差異がある。周辺地域の各遺跡で独自性が強く、同一の形態特徴をもつものが少ない点が円筒棺の特徴といえる。

今回、資料紹介した円筒棺については副葬品も伴っていないため、時期的な位置づけを明らかにすることは困難であるが、内田山B1号墳との共通性が高い点を評価すると中期前半の可能性が高い。また、円筒棺とともに保管されていた円筒埴輪を積極的に評価するならば、円形の透孔を穿ち、黒斑を伴い、B種ヨコハケを施していない点から、前期末から中期前半の可能性が高く（川西1978）、円筒棺と円筒埴輪にはおおむね時期的な差異はない。これまでの研究において円筒棺の出現については、中期に畿内地域を中心に出現することが指摘されており（川口2000）、これらの時期とも一致している。（北山）

③銅製品

西山2号墳出土の有樋銅鏃の観察 西山古墳群では2号墳東塚から有樋銅鏃が出土している（小泉ほか1999, 図17-10, 春日2013, 図5-1）。有樋銅鏃は、近畿地方の8基の古墳での出土が知られ、その他にもいくつかの出土地不明資料が知られている。これらは、樋を有するという特徴を共有するものの、その形態はバラエティーに富んでいる。その変遷観については諸説あるものの、複数の属性による分析や他の銅鏃との比較検討といった手続きが未だとられていない。本研究ではこれらを行うことで、西山2号墳東塚の年代を考察することとしたい。

まずは、すでに報告されている銅鏃の特徴を再観察し、整理しておこう。西山2号墳出土有樋銅鏃は、樋が関部まで達している、樋の断面が弧状に窪む、篋被を有するなどの特徴がある（第8図-1）。これらに加えて新たに筆者が着眼したのが関部付近の痕跡である。実測図において矢印a・bで図示



第9図 西山2号墳東槨出土銅鍔

した箇所には、関の曲線の方向とほぼ直交する角度で突出した箇所がある。突出部の片方は端面が研磨され、もう一方は欠損・錆化しオリジナルの外形線を失っているものの同様の突出部⁴⁾が認められる(第8図-3)。また、関部の端面は左右対称に存在し、突出部が作りだす段差を残しつつ粗い研磨が施されていることから、突出部自体は鑄造欠陥などによるものとは考えられない。

これらの突出部は、現状が完成品の形態であると考えのほか、破損した、または湯が回り切らず鑄造に失敗した部分を研磨した痕跡とも考えられる。後者を想定した場合、残存する刃部と突出部のライン、破断面の厚みから短い腸袂が復元できる(第8図-2)。なお、南丹市園部垣内古墳出土銅鍔(D3)を観察したところ、同様の突出部がほぼ同じ位置・形状で認められた。突出部の端面は研磨が施されず破面となっている。

型式学的検討 以上、西山2号墳出土銅鍔の観察知見を示した。これらをもとに、他の類例も含めた型式学的分析を行う。まずは各属性を分類し属性分析をもとにした型式設定を行い、型式間の関係性を明示するとともに、製作における段階を設定する。この際に有樋銅鍔が自立的な系列をなすのか否か念頭に置く必要がある。有樋銅鍔は樋をもとに独立した型式として定義できる一方で、樋の特徴自体を銅鍔生産において散発的に付加されるイレギュラーな要素として理解することもできる。そのため、同時代における他型式の銅鍔との共通性に配慮する必要がある。

まず、有樋銅鍔の諸属性を分類する。有樋銅鍔の有する属性のうち、時間的な複雑化・退化の方向性を直接的に説明できるものはない。そこで、属性自体の分類が明確な基準を持って可能であり、全ての有樋銅鍔が有している、属性①：関部および腸袂の特徴、属性②：樋の形態、属性③：篋被の有無の三つの属性を抽出し以下のように分類する。なお、属性②の分類は、鐘方正樹による分類の方法を踏襲している(鐘方2005)。

①関部および腸袂の特徴… a類：丸関で長い腸袂を有する。 b類：丸関で腸袂状の突出部が認めら

第1表 有樋銅鍬の属性分析と型式設定

資料名(出土古墳)	府県	属性①			属性②		属性③		型式	段階
		a	b	c	a	b	a	b		
元稲荷古墳	京都	○			○		○		1A式	1
玉手山4号墳	大阪	○			○		○		1B式	
西山2号墳	京都	○			○		○		2式	2
園部垣内古墳D3	京都	○			○		○		2式	
園部垣内古墳D1	京都		○		○		○		3A式	3
松岳山古墳	大阪		○		○		○		3B式	
長法寺南原古墳	京都		○		○		○		3B式	
東大寺山古墳	奈良		○		○		○		3C式	
出土地不明(高田2019、個人蔵A)	-		○		○		○		3B式	
出土地不明(高田2019、個人蔵B)	-		○		○		○		3B式	
出土地不明(高田2019、個人蔵C)	-		○		○		○		3B式	
長岡京市教委蔵(高田2019)	京都		○		○		○		3B式	

れ、短い腸袂が復元できる。c類：S字状にカーブする関部で腸袂を有さない。

②樋の形態… a類：樋が関の端部まで達する。b類：樋が関の端部まで達さない。

③篋被… a類：篋被を有さない。b類：篋被を有する。

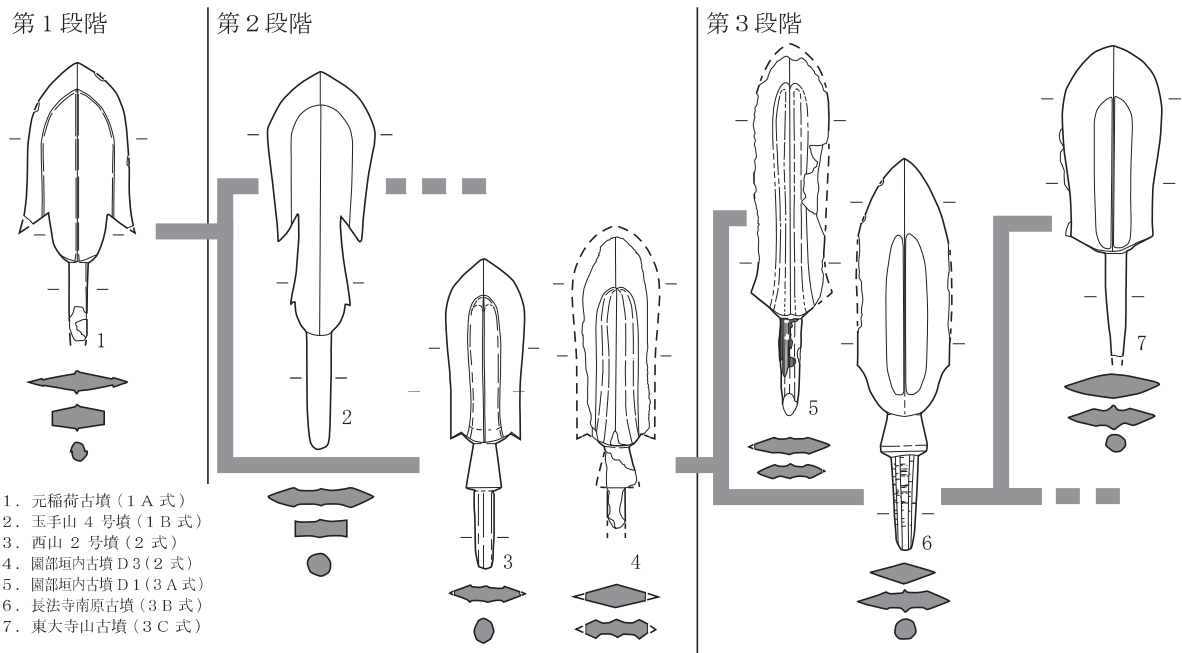
以上の属性分類をもとに、属性分析を行う。属性内での直接的な新旧関係が推定できないため、総合的に最も古い時期の古墳に副葬

されている元稲荷古墳出土銅鍬を始点とした変遷を仮定する。連続的な形態変化が認められる属性①に、属性②を対応させることで各資料を配列した。なお、篋被については、有稜系銅鍬の出現期から篋被がある銅鍬とない銅鍬が併存し、その初現は弥生時代に遡ることが指摘されている(高田2001)。そのため、属性分析においては篋被の優先順位を下げている。

その結果、属性①がa類→b類→c類の順に変遷するのにしたがい、属性②はa類からb類へ変遷する様相が認められた。また、篋被は有樋銅鍬では後出的な特徴と推定できる。以上の諸属性の変遷をもとに、属性①がa類のものを1式、属性①がb類のものを2式、属性①がc類のものを3式として型式を設定した(第1表)。なお、3式は樋の形態と篋被から細分した。1式についても細分を行ったが、これらについては後述する。

以下、設定した諸型式の変遷観を示したい(第10図)。1式は元稲荷古墳出土銅鍬と柏原市玉手山4号墳出土銅鍬が該当し、形態的にも他の有稜系銅鍬とは異なっている点がいくつか存在する。丸関は他の腸袂式銅鍬には見られない特徴である。また、平面形態において共通する銅鍬は認められず、鋒から腸袂の先端にかけて一定の幅の刃部が巡る構造は特異である。元稲荷古墳出土銅鍬と玉手山4号墳出土銅鍬は設定した属性分類から同じ1式に分類できるものの、玉手山4号墳出土銅鍬は腸袂の基部から関部までが長く伸びる特徴があり、形態的に異なっている。そのため、元稲荷古墳出土銅鍬を1A式、玉手山4号墳出土銅鍬を1B式と細分した。型式学的知見からこれらの明瞭な時間差を説明することは難しいが、刃部の外形に着眼した際には一定の連続的変化が見込める。1A式は刃部の外形が腸袂に向かって外反しつつ伸びる一方で、1B式は内傾しながら伸びる。1B式の特徴は同時期または時期的に遅れると考えられる2式とも共通することから、1B式が後出することが想定できよう。なお、鋒から樋の先端にかけての鑄の長さも連続的な変化を示す属性と考えられ、次第に長くなる変化が見込める。この場合もやはり1B式が後出すると考えられる。

2式は、西山2号墳出土銅鍬と園部垣内古墳出土銅鍬A(報告D3)が該当する。丸関や樋a類などの1A・B式の属性を踏襲する一方で、篋被を有する点や断面が多面体を呈する茎部の面取り加



第10図 西山2号墳東槲出土銅鏃

工、関部の粗い研磨による整形などの柳葉式銅鏃の特徴も多く兼ね備えた資料といえる。腸袂状の突出部は、両資料ともに欠損または研磨面をもつ痕跡として遺存しているため、製作時から研磨面をもつ端部であったか、本来腸袂を有していたか明らかでない。腸袂であった場合、腸袂の長さは先行する1A・B式と比べて短く復元できる。なお、1B式のもつ腸袂の基部から関部までが長く伸びる特徴は継承しないため直接的系譜を1B式に求めることはできないが、先述の通り刃部形態は1B式に近似する。そのため、1A式に系譜を持つものの1B式よりも成立が遅い型式として評価できよう。また、2式に該当する2例は、先述の鋒から樋の先端にかけての鏃の長さが異なる。先述のとおり、この鏃の長さが長くなる変化は、1式から3式にかけて生じる連続的な変化としてとらえることが出来る可能性があるため、園部垣内古墳出土銅鏃（D3）は、西山2号墳出土銅鏃の製作より新しい時期に製作されたものと推定できる。

3A式と3B式は2式から派生した型式であり、それぞれ篋被の欠落と樋の形態の変化という異なる二つの方向性の変化が認められる。また、3B式から篋被が欠落し3C式が成立する⁵⁾。3式には、全長および鏃身が伸長するものや幅が広がったものなどが含まれる。

以上の有樋銅鏃の型式とその変遷観から、以下の製作における3つの段階を設定することができる。第1段階は有樋銅鏃の成立段階であり1A式が該当する。1A式は形態や製作技術において他の有稜系銅鏃と異なる点が多く、有樋銅鏃の型式としての独立性が想定できる。古墳に副葬される銅鏃には、有稜系鉄鏃に系譜を持つものと弥生時代の銅鏃に系譜を持つものの二者の存在が指摘されている（川西1990、松木1991）。これらの前提に立ち、有樋銅鏃の最古段階と考えられる元稲荷古墳出土銅鏃を他の有稜系鉄鏃や弥生時代の銅鏃と比較した場合、直接的な系譜がたどれる資料はない。また、弥生時代の銅鏃には、法量や刃部形態において類似する大型の銅鏃（八尾市亀井遺跡・名古屋市西志賀遺

跡など)が存在するものの、半円形の関部や幅の広い樋、厚い鍔身、良好な研磨といった特徴を持ったものは存在せず、これらの直接的な系譜を弥生時代の銅鍔に求めることは難しい。したがって、有樋銅鍔は有稜系銅鍔の成立に伴って生じた独立性の強い製作系統であるといえよう⁶⁾。

第2段階は有樋銅鍔に他の有稜系銅鍔の特徴が認められるようになる段階であり、2式が該当する。2式は、1式からの連続的な変化が認められるものの、形態的特徴や製作技術上の特徴が通有の柳葉式銅鍔と共通するようになり、製作状況が変化したことが想定できる。換言すれば、当該段階は製作における独立性を失っていく段階と解釈できる。また、1A式から派生し後続する1B式も当該段階に含まれるものとする。

第3段階は、有樋銅鍔に形態的なバリエーションが生じる段階であり、3A・B・C式が該当する。当該段階には有樋銅鍔が独立した型式変化を遂げることはなく、属性としての樋は銅鍔生産においてイレギュラー的に発生するものと考えられる。併行する時期の他の柳葉式銅鍔がたどった大型化や鍔身の伸長、幅広化に連動した型式の派生が認められる。これらは、柳葉式銅鍔全体でみても後出的な特徴と考えられ、松木武彦が銅鍔生産における規格性の崩壊過程として指摘したものである(松木1992)。

以上をまとめると、第1段階において独立性の強かった有樋銅鍔は、第2段階以降では形態的特徴や法量、型式変化において他の柳葉式銅鍔と連動性が認められるようになり、これらに応じた生産状況の変化が生じていたことが想定できる。高田健一は、属性の共通性が柳葉式・大形品の製作者と有樋タイプの製作者の近さを物語るものとして指摘しているが(高田2013)、これらは時間の経過とともに高まっていったと考えられよう。

小結 西山2号墳出土の有樋銅鍔に対する先行研究の評価と、本研究において新たな得られた知見を比較検討することでまとめたい。松木武彦は最末期の銅鍔を変化の方向性から4つの類型に分け、その一つに有樋型を含めた。検討の結果、第I段階に長法寺南原古墳出土銅鍔、柏原市松岳山古墳出土銅鍔、第II段階に東大寺山古墳出土銅鍔、第IV段階に園部垣内古墳出土銅鍔(D3)を当てている(松木1992)。松木と筆者の有樋銅鍔の新旧関係が一致しない理由として、変遷観の違いがあげられる。筆者は、諸属性の分析から第1段階において強かった型式としての独立性が、2段階以降に弱まり、他の柳葉式銅鍔との共通性が認められるようになる理解を示した。一方で、松木は、新規格の創出と連続的な退化・変容に基づく時間差を想定している。筆者自身も松木の指摘した規格性の弛緩・崩壊は有効な指標と考え自身の変遷観に含んでいるが、先行する1式との系譜関係を考慮した際には松木が第IV段階とした2式は3式に先行する型式とすべきである。

また、池淵俊一が元稻荷古墳出土銅鍔と玉手山4号墳出土銅鍔の類似性を指摘して以降(池淵2002)、これらは有樋銅鍔に先行する資料として理解されるようになった。鐘方正樹は、有樋銅鍔の多系列的展開を想定し、樋の形態などの特徴から有樋銅鍔を3系統に区分した(鐘方2005)。筆者の見解は鐘方の変遷観に近似しているが、鐘方は長法寺南原古墳出土銅鍔および松岳山古墳出土銅鍔(鐘方B系、筆者3B式)がA系の影響で成立するとした点で筆者と異なる。また、鐘方はC系1類(筆者2式)が前期中葉に遡ることを指摘する一方で、C系の成立過程やB系とC系との関係性には言及

していない。これらは、筆者の指摘した関部および腸袂の形態変化（属性①）に基づくことで、1式から2式、そして3式への派生関係がより明瞭に説明できると考えている。

また、近年では樋部断面形態の変化が時間差として抽出できる可能性が指摘されている。鐘方正樹は平坦な樋をもつ元稻荷古墳出土銅鏃から、窪む樋をもつ玉手山4号墳出土銅鏃への変遷を指摘した（鐘方2005）。その後、南部裕樹は樋部の窪みが徐々に深くなる変化を抽出し、単系列的な変遷観が提示した。南部の分析によると、元稻荷古墳→松岳山古墳→玉手山4号墳→園部垣内古墳の順に窪みが深くなる（南部2014）。また、高田健一は新資料を含めた製作技術的な検討からこれを追認している（高田2019）。

樋の断面形態が鋳型からほぼ変更がないのか、樋の窪みは研磨により一定の変更がなされるのかは、鋳型とそれに対応する製品の出土を見ないことから不明確である。これらについて示唆的なのが、高田健一が指摘した、松岳山古墳・長法寺南原古墳出土銅鏃と同型式の出土地不明の4例である。高田はこれら4例の樋が鋳はなしで平坦であることから、鏃身中央部に平らな面を作り、そこを二分割する細線を彫り込む鋳型の製作工程を復元した。これらは、鏃身中軸線を突出させつつ刃縁部と段差をつけて中央部を低くするように彫り込む元稻荷古墳出土銅鏃の製作工程から簡略化した工程であり、これらの延長線上に窪む樋をもつ有樋銅鏃があったとした（高田2019）。

高田の指摘通り、元稻荷古墳出土銅鏃が製作工程の観点からも最古段階に位置づけられることは首肯できるが、窪みの深さが時間の経過とともに深くなるか否かについては再検討の余地がある。西山2号墳および園部垣内古墳出土銅鏃の樋が明瞭に研磨が施されていることに加えて、東大寺山古墳で出土した22点の有樋銅鏃は、同一の3C式であっても樋の窪みが深いものや浅いものが存在しており、樋の窪みの深さが表裏において異なるものもある。これらの資料からは、製作工程における樋の窪みの形成は明確な規範がなく、樋の窪みが次第に深くなることの型式学的な説明はできないといえよう。また、高田の指摘した筆者分類の3B式の製作技法は、樋の形態におけるa類からb類への変遷とも関連し、研磨工程の省略と捉えられる。細線の利用も、樋状の構造をより少ない作業量で作り出す製作の効率化とも理解でき、より後出的な要素とも考えられよう。

以上の通り、先行研究と筆者の分析結果の共通点と相違点を示した。これらを総括すると、属性分析に基づく型式学的見地からは、西山2号墳出土銅鏃が従来の変遷観よりも遡り、元稻荷古墳出土銅鏃が該当する第1段階に続く、製作における第2段階に位置づけられると結論付けたい。（菊池）

④鉄製品

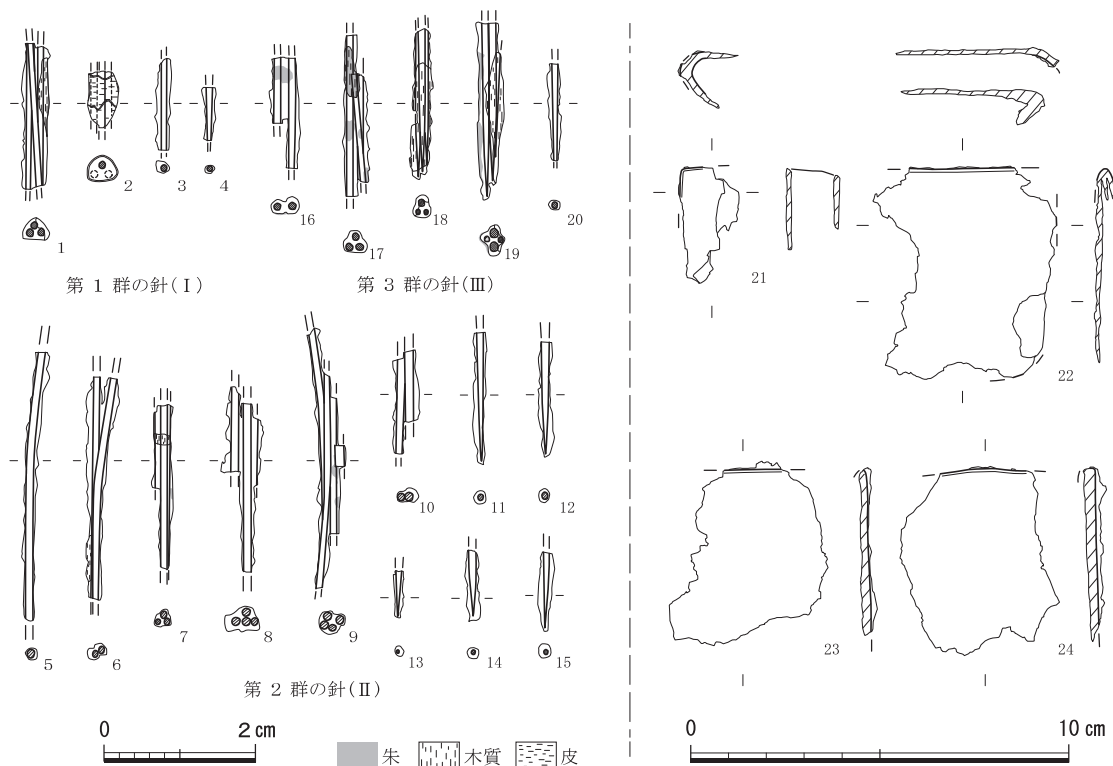
西山1・2号墳の鉄製品について 西山1・2号墳では、発掘調査に伴い数多くの鉄器が出土した。その概要や実測図に関しては、これまで発掘調査時の報告（堅田・白石1962）や『城陽市史』（小泉ほか1999）、保存処理に伴う報告（春日2013）において公表されてきた。しかし、同志社大学歴史資料館所蔵資料の中には、土器・埴輪と同様に実測図や観察所見が公表されてこなかった鉄器が一定数存在しており、これらには西山古墳群の位置づけを検討する上で重要な資料が含まれる。本節では、以下、未報告であった鉄器類を報告し、その型式学的位置づけを示したい。

西山1号墳棺内出土針 1号墳主体部の棺床の北西隅から3群に分かれて針が出土している。長さ
と本数は各群により異なり、発掘調査時には、第1群が約9cm×3本、第2群が約10cm×6本、第3
群が約9cm×4本と認識されている（堅田・白石1962）。しかし現状では、針はいずれの群も細片化
しており、報告時と本数・長さの認識が異なる⁷⁾。

本節では、比較的残存状況の良い破片や先端部が遺存する破片を抽出して図示する（第11図左）。
本古墳の針は、すべて断面円形を呈し、径は0.1~0.15cm内におさまる。また、径は先端部付近で徐々
に細くなる。上端部が遺存する資料は存在しないが、取り上げ時に記録された全長を踏まえると、古
墳副葬針に通有の形態・法量を呈しているといえる。各群は、個体同士が束ねられたように接してお
り、木筒や皮と捉えられる有機質が表面を被覆する。また、第2・3群の資料には、部分的に朱とみ
られる赤色顔料の付着が認められる。

西山2号墳中央槨棺内出土鉄鋤先 西山2号墳では、中央槨棺内北端から方形板鉄鋤先が出土した
ことが報告されている。『城陽市史』の記載によれば出土点数は1点のみであり、実測図・写真は公
表されていない。本館には、「方形板鉄鋤先」と注記された資料が所蔵されているものの、錆の進行
により細片化し、かつ錆膨れにより接合も不可能であった。そのため、本節では比較的残存状況の良い
破片4点を図示し（第11図右）報告する。なおこれらは、『城陽市史』の記載に拠る限り、同一個
体に復元される。

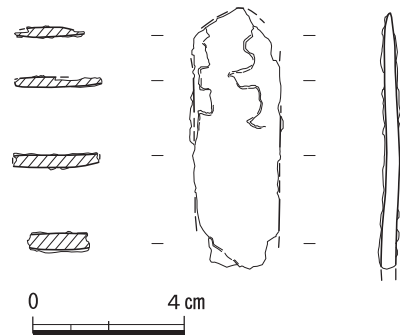
21は、左袋部の上端と考えられる破片である。袋部幅は最大1.3cmをはかり、U字状に屈曲する。
22は、右袋部の破片であり、縦幅5.6cm、横幅残存長4.8cm、鉄板厚0.3cmをはかる。袋部の下半が遺存し、



第11図 西山1・2号墳出土鉄器実測図（1/1、1/2）

刃部隅はやや丸みを帯びるようである。23・24は実測図上方が遺存するが、部位は正確に特定できない。おそらく21・22の裏面に本来接合するものと考えられる。

西山2号墳東槨棺外出土鉄鏃 西山2号墳では、東槨棺外西側から韃に収められた状態で21点の鉄鏃が出土している⁸⁾。『市史』においては、「大型品」1点「小型品」20点の鉄鏃が存在すると記載されており、これまで比較的残存状態の良い「大型品」1点のみが図化され公表されてきた(小泉ほか1999 図17-11、春日2013 図5-2)。この、『市史』・春日



第12図 西山2号墳出土平根系鉄鏃実測図(1/2)

論文において柳葉式鉄鏃と報告されてきた鉄鏃であるが、再度検討を行ったところ、鏃身下半部が断面長方形状を呈し、平根系の大型先刃式(川畑2009)の範疇で捉えられることが判明したため、再実測を行った(第12図)。外周はおよそ破面であるが、鏃身長6.0cm、関部幅2.1cmと推定され、刃部先端は山形を呈する。茎部の形態も明瞭ではないが、割れの形状から、斜角関もしくは丸関である可能性が高い。厚みは、鏃身部から茎部にかけてやや肥厚する特徴を持ち、0.3~0.4cm内におさまる。

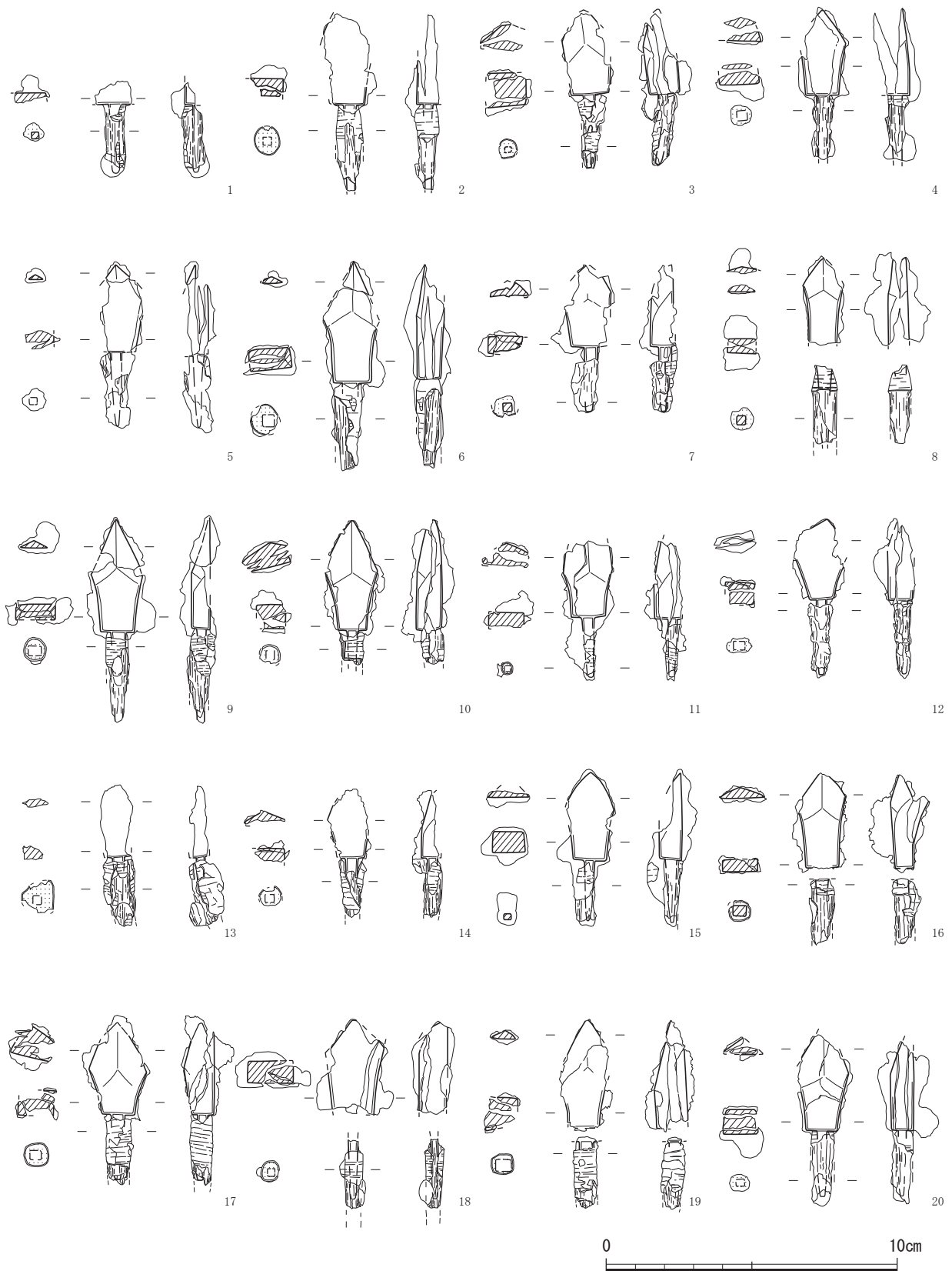
また、本報告に際し、「小型品」に関しても接合検討を行ったところ、錆により破損した20点のほぼすべてについて、形状を復元することができた。本節ではこれらを報告し、観察から得られた知見を提示する。

改めて未報告の20点の資料を精査すると、既報告の1点とは異なり、すべてが定角式鉄鏃に復元された。以下、実測図(第13図)と一欄表(第2表)にその概要を示す。なお、表・図に付した番号(No.1-20)は、遺物収納時のラベルに従っている。

定角式鉄鏃は、全長はおよそ5.0~7.0cm、鏃身長2.8~3.9cmであり、刃部が明瞭に残る資料はすべて片鑄造りと考えられる。錆割れにより視認できるものは少ないが明瞭な鑄を持ち、刃部の断面形は二等辺三角形状を呈する。しかし、側面から見て鏃身の中軸付近に刃部側線が来る資料も存在し、側面形態はややばらつきがある。鏃身の最大幅1.7~2.0cmであり、最大厚は0.6~0.7cm前後である。鏃身下半の断面形は、長方形であり、鏃身側面と鏃身尻には明瞭な面を持つ。茎部は長さ2.0~2.9cmであり、断面は方形である。なお、関部の断面が、茎部を境に層状に錆び割れる資料が存在し(No.19)、鉄鏃の製作工程を考える上で示唆的である。

第2表 西山2号墳出土定角式鉄鏃計測表(単位はcm)

番号	型式	全長	鏃身長	関部幅	茎部長	鏃身最大幅	最大厚	番号	型式	全長	鏃身長	関部幅	茎部長	鏃身最大幅	最大厚
1	定角式	(3.1)	(0.6)	(1.1)	(2.4)	-	-	11	定角式	(4.8)	(2.7)	1.2	2.1	1.7	-
2	定角式	(6.0)	(3.1)	(1.15)	2.9	-	-	12	定角式	(5.4)	(2.8)	0.85	2.6	-	6.5
3	定角式	5.3	3.0	1.3	2.5	-	-	13	定角式	-	(2.5)	(0.85)	-	-	-
4	定角式	(5.2)	2.9	1.15	2.2	-	-	14	定角式	(4.2)	(2.35)	(0.85)	2.0	-	-
5	定角式	5.6	3.0	(0.8)	(2.5)	-	-	15	定角式	5.1	3.0	1.15	2.1	1.7	6.5
6	定角式	(7.2)	(4.2)	1.3	(3.0)	-	6.5	16	定角式	-	3.3	1.15	-	-	6.0
7	定角式	5	2.8	0.95	2.2	-	6	17	定角式	5.4	3.15	1.15	2.25	2.0	7.0
8	定角式	(5.7)	3.0	0.95	(2.7)	-	-	18	定角式	5.2	3.2	-	2.0	-	6.0
9	定角式	7.0	3.9	1.15	3.1	1.8	6.5	19	定角式	-	3.7	1.05	-	-	-
10	定角式	(5.0)	3.8	1.0	(1.15)	1.8	-	20	定角式	(5.6)	(3.3)	1.1	2.3	-	-



第13図 西山2号墳出土定角式鉄鏃実測図（1/2）

矢柄の口巻きは直径0.8cm前後であり、口巻きの長さは1.7～2.1cmである。口巻きは樹皮であり、一部の資料に、黒漆の痕跡が認められる。

西山1・2号墳出土鉄器の編年的検討 西山1号墳で出土している針は、数本の針を木製の筒に入れた状態で確認されている。古墳出土針について検討を行った魚津知克の研究によれば、魚津編年 i・ii 期に帰属する芝ヶ原12号墳や東近江市雪野山古墳などで認められている針状鉄器は、基本的に一本単位で出土し、かつ木筒・糸巻きによる被覆といった付属的属性が認められないことから、確実に針と同定できる資料は少ない（魚津2019）。付属的属性を持つ確実な針の出土例は、園部垣内古墳や犬山市東之宮古墳など、魚津編年 iii 期以降にあらわれる⁹⁾。

次に、西山2号墳出土鉄器について検討を行いたい。東柳から出土した鉄鏃に関しては、これまで報告されてきた第12図の資料を含み、複数形式の鉄鏃が出土していることが判明した。川畑純の分類に照らせば、定角式（第13図）と大型先刃式（第12図）の2形式が存在する（川畑2009）。

定角式の資料は、刃部の形状が直線をなすことから、川畑の型式分類におけるA2式に分類され、川畑編年 I 期新相前後の資料と捉えられる。一方No.15・16・17・19のように、やや刃部にフクラを持つ資料が存在し、A3式（II期古相）への過渡的形態と捉えうる。

近畿における片鑄造りのA2型式の資料は、ほかに雪野山古墳例や椿井大塚山古墳例などが挙げられ、樹皮巻きを有する点では共通するが、類例と比して本古墳の資料は関部に厚みを持つ。鏃身下半部の形状や刃部形態にバリエーションを持つ点においては、天理市黒塚古墳の組成に似るものの、黒塚古墳例はすべて両鑄である（水野2018）。

第12図の資料は、先述したように、鏃身下半部に刃部が形成されていない点から、柳葉式ではなく、大型定角もしくは圭頭式に該当すると考えられる。関部の形態が判然としないため、型式の細分は難しいが、川畑編年の I 期から II 期古相に位置付けられる（川畑2009）。一方、ライアン・ジョセフが指摘するように、平根系定角式鉄鏃（川畑分類の大型定角・圭頭式鉄鏃）は通常刃部関が茎部関に比して張り出す特徴を持つため、本古墳例はやや異質である。しかし、同形式は同時に、多元的な在地生産に由来する形態の「揺れ」を持ち（ライアン2019）、本例もその範疇におさめたい。

鉄鏃の数量に着目すると、前期古墳の鉄鏃の副葬形態を分析した松木武彦は、平根系鉄鏃（扁平で鑄のない大形品を中心とする一群）と有稜系鉄鏃（銅鏃と同じ形態を持つ厚手・小形の一群）が同一の主体部で共伴する場合は、つねに前者が後者に対して少数派になると指摘しており（松木1991・1996）、本古墳例における大型先刃・定角式鉄鏃の数量の差とも整合的である¹⁰⁾。また、副葬される有稜系鉄鏃が定角式のみで構成される古墳は、前期前半でも比較的古相に位置付けられるようである。以上より、西山2号墳に副葬された鉄鏃は、集成編年2期後半～3期前半ごろの資料であると考えられる。

最後に、農工具について検討を行う。東柳では、有袋鉄斧と板状鉄斧が共伴する。袋状鉄斧は、袋部が開放しており、袋部下端と刃部が密着しないため、魚津編年 i・ii 期に位置付けられる（魚津2000）。また、板状鉄斧は刃部に対して基部が細くなり、椿井大塚山古墳・真名井古墳などに類例が存在する。よって、集成編年2期後半～3期ごろを想定する。

中央槨の資料についてみると、方形板鍬鋤先は、魚津編年 i・ii 期段階の出土例は極めて少なく、魚津編年 iii 期以降本格的に認められるようになる（魚津2000・2003）。魚津編年 ii 期以前の出土例として、岡山市浦間茶臼山古墳例などが挙げられるものの、近畿における出土例は元稻荷古墳の袋部片など、ごく少数に限られる。よって基本的に魚津編年 iii 期以降の年代を与えたい。袋状鉄斧の形態は東槨の資料と近似するほか、ヤリガンナに布巻の痕跡が認められることから、東槨と同時期の鉄器組成と捉えられる。（繰納）

4 西山1・2号墳の位置づけ

以上のように、これまで知られていなかった資料を中心に西山1・2号墳の遺物を概観した。本論のまとめとして、すでに報告されていた資料も踏まえ、それぞれの古墳の位置づけ考えておきたい。なお、前期古墳の編年観に関しては近年では副葬品の組列から、大賀克彦が前期を7区分しているほか（大賀2002、2013）、岩本崇らによる前期を5区分した整理がある（岩本編2018）。しかし、前期前半に関しては、副葬品が貧弱な本古墳では運用が難しいため、本論では比較的小地域内での対比が行いやすい集成編年（広瀬1991）のなかでの位置づけを提示したい。

①編年的位置付け

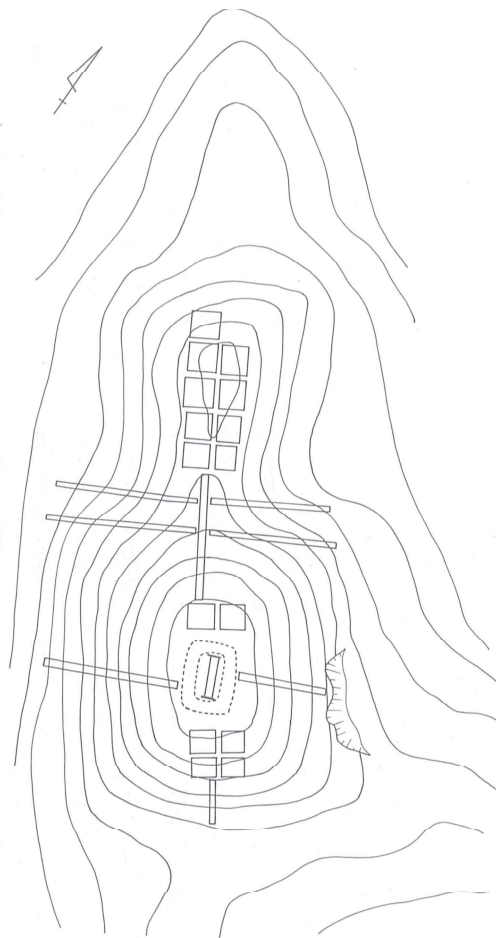
1号墳 1号墳に伴う遺物としてこれまで図化されていたのは、土師器3点のみであった。さらに、埋葬施設が発掘調査を担当した堅田直によって「西山型粘土槨」とされる特異な粘土槨と評価されたため、その編年的位置付けは必然的に粘土槨出現以降の前期後半とされてきた。しかしながら、墓壇埋土に粘土が多用されていることには間違いはないが、埋葬施設を密閉する「槨」として評価することは難しく、特異な木棺直葬墓とした方がより実態に近いように思われる。

出土遺物は、埋葬施設から出土した針と、墳丘上から出土した土師器類がある。針に関しては、木筒や糸巻きが認められるものは前期中葉以降の古墳に多いが、弥生時代終末期の墳丘墓からも単発で出土する事例があり、時期比定の指標とすることは難しい。他方、土器類は墳丘上に供献されたものか、盛土内に含まれていたものか判然としないという制約はあるものの、事実報告の項で述べたように、布留式中段階古相までには収まる資料である。大規模な墳丘を持つにも関わらず外表施設として葺石・埴輪を持たず、段築もないこと、盗掘を被っているとはいえ、副葬品が貧弱であることなど、やや消極的な根拠であるが、1号墳を前期前半にさかのぼらせる障害にはならない。

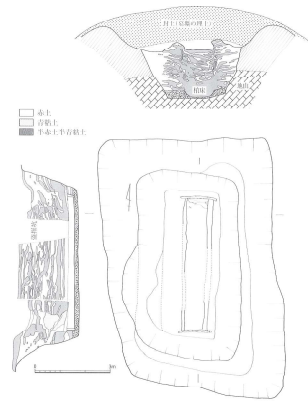
また、墳丘裾から出土したと推測される円筒棺は、前期末から中期前半に属するものであるが、前段階の古墳周辺に埴輪棺を埋葬する事例はしばしば認められるため（清家1999）、円筒棺が直接古墳築造の時期を示すと考える必要はない。

したがって、やや根拠には欠けるものの、現状得られている資料からは、古墳時代前期前半、集成編年2期に位置づけておきたい。

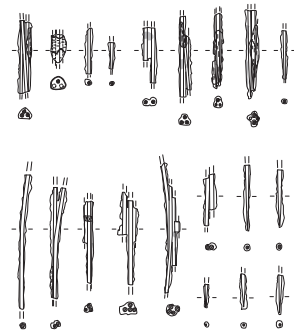
2号墳 2号墳には木棺直葬墓の中央槨、粘土槨の東槨、西槨、直葬墓の南槨の4基の埋葬施設がある。中央槨は粘土槨と評価されてきたが、木棺小口の粘土は粘土槨の構造というよりも木棺直葬墓に認められる小口側の粘土抑え構造と類似しており、1号墳と同様、木棺直葬墓の範疇で理解してお



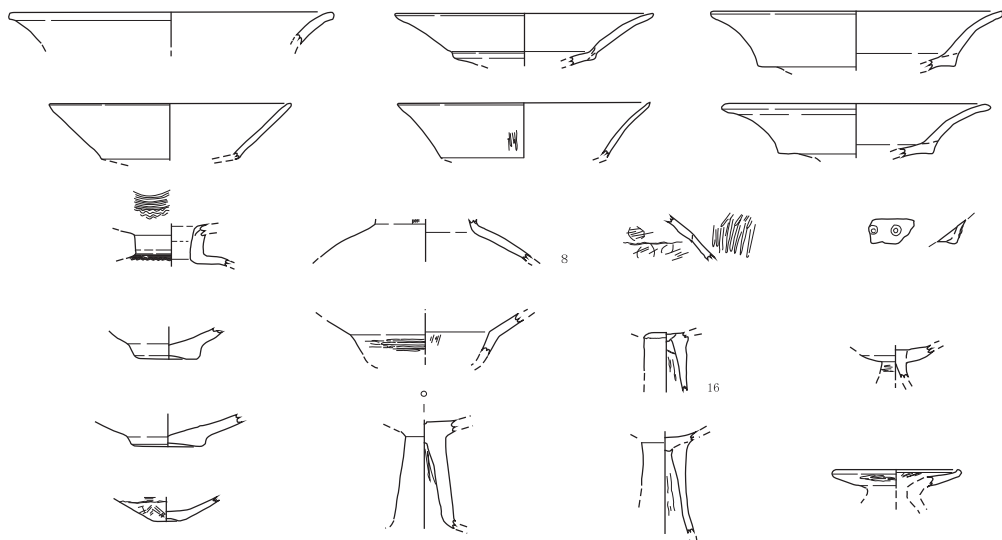
墳丘実測図 (1/1,000) (小泉ほか 1999)



埋葬施設実測図 (1/500) (小泉ほか 1999)

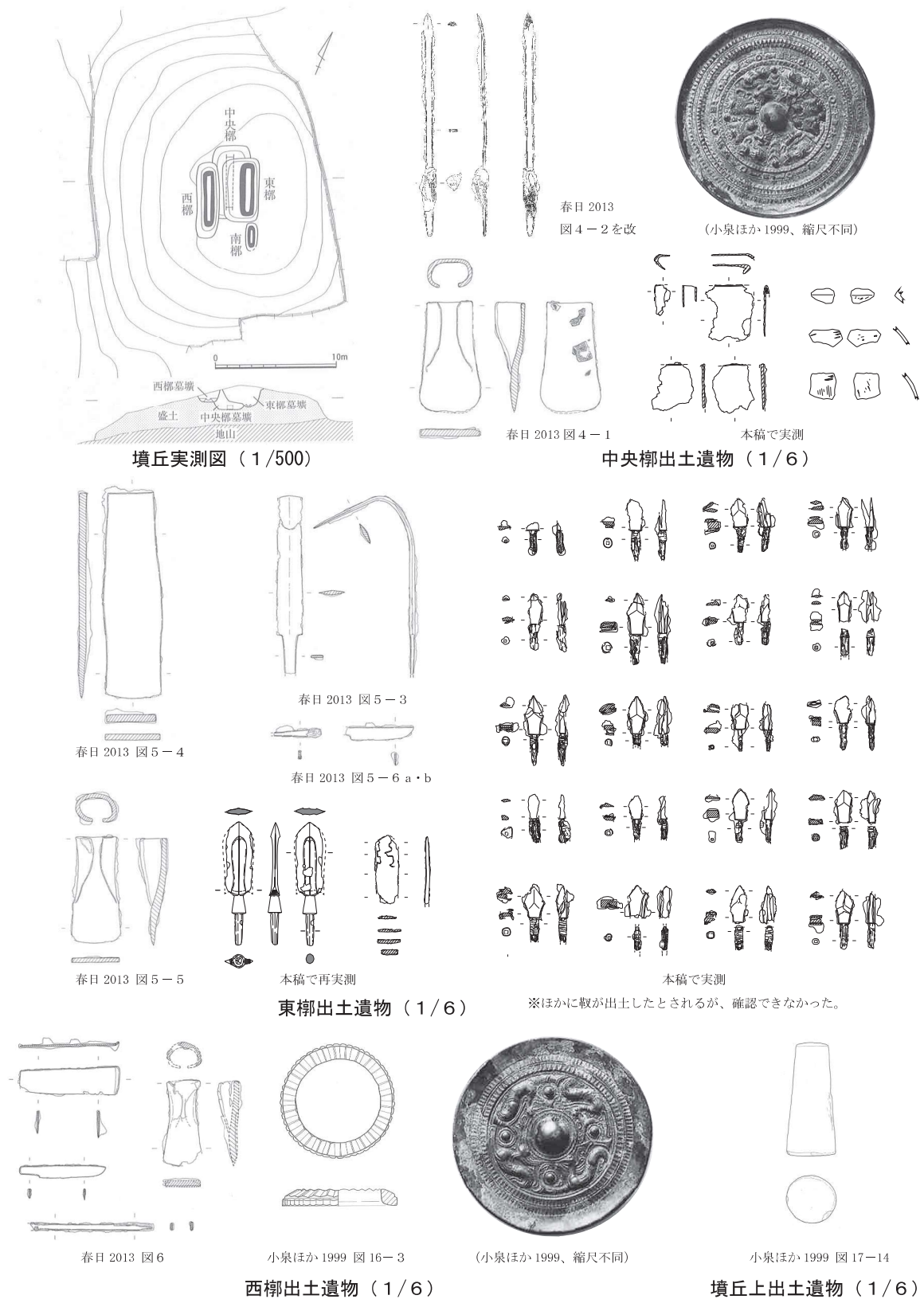


埋葬施設出土針状鉄器実測図 (1/2)



墳丘上出土土器実測図 (1/6)

第14図 西山1号墳の概要



第15図 西山2号墳の概要

きたい。また、東郭、西槨は詳細は不明ながら、棺底粘土を持つなど粘土槨としては典型的な構造であり、その年代の上限は粘土槨出現以降ということになる。

中央槨の遺物の中で新たに凶化できたものとして土器と鉄製農工具有る。土器は盗掘坑から生駒山西麓産胎土の庄内形甕が出土しており、埋葬施設が粘土槨である東槨・西槨に伴うのではなく、中央槨に伴っていたと考えられる。鉄器類についても先述のように、前期前半の様相を示している。このことは、三角縁神獸鏡が舶載A段階（福永2005）のものであることとも矛盾しない。1号墳との前後関係を遺物から検討することは難しいが、従来立地から1号墳が先行することが想定されてきたことを重視するならば、集成編年2期～3期前半の年代を考えておきたい。

東槨に関しては、今回の再検討の結果、銅鍬、鉄鍬に関して新たな知見を得ることができた。銅鍬は従来、有樋銅鍬の中でも最新型式に位置づけられていたが、再検討の結果、元稲荷古墳出土銅鍬よりは後出するものの、園部垣内古墳出土銅鍬との共通点が見出され、従来の変遷観よりもさかのぼることが明らかとなった。また、型式不明とされていた鉄鍬群も有稜系の定角式鉄鍬であることが判明した。定角式のみからなる鉄鍬の組成は前期前半に多く認められ、先の銅鍬と同様、従来の評価よりも時期が遡る可能性が高い。しかしながら、粘土槨成立以降であることには異論はなく、中央槨に後続し、集成編年3期の中で理解するのが良いだろう。

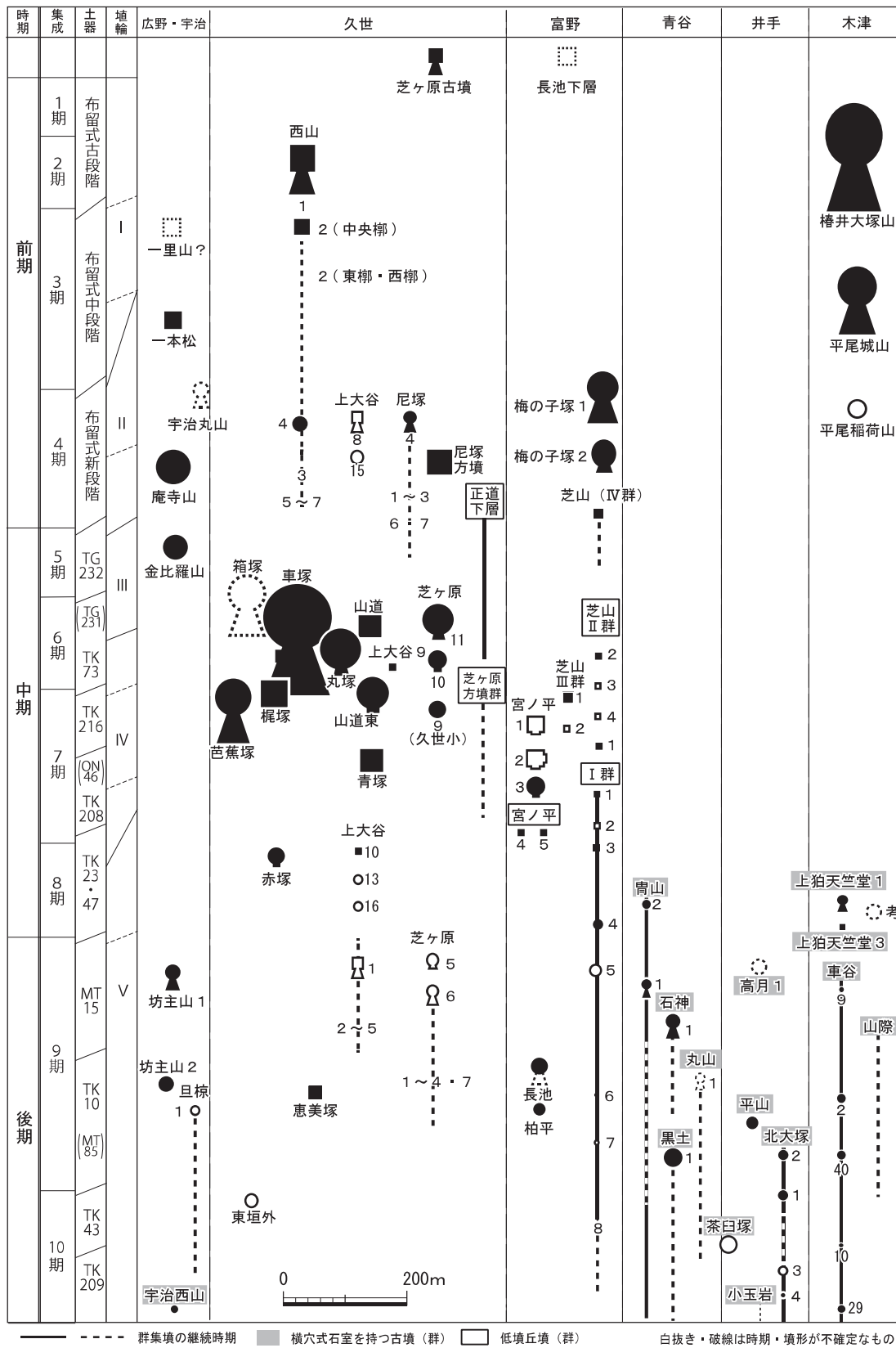
②京都府南部における西山古墳群の位置づけ

西山古墳群は、これまで前期後半、集成編年3期後半～4期に築造された7基の古墳から構成されたと考えられてきたが、今回の再検討の結果、少なくとも1号墳および2号墳中央槨は集成編年2期までさかのぼる可能性が高いことが判明した。西山古墳群は1・2号墳以外は小型の円墳、前方後円墳から構成されるとされてきたが、前期前半の2基では方丘墳、後半の5基は円丘墳と再整理可能である。久津川古墳群では芝ヶ原古墳をはじめ、弥生時代終末期以来方丘墳が主体である。したがって墳形からみると、西山1・2号墳も多分に漏れず、在来的要素を残した古墳であるといえよう。

第16図には、木津川右岸域における古墳の編年案を提示した。これまで久津川古墳群では、前期古墳は集成編年3期後半に位置づけられる一本松古墳の出現を待たねばならないとされてきた。そのため、弥生時代終末期の芝ヶ原古墳の築造後、前期古墳が築造されるようになるまでヒアタスがあったが、西山1・2号墳はこの空白を埋める古墳として再評価するべきであろう。

1号墳墳裾から出土した可能性が高い円筒棺は、1号墳築造よりも時期が下るものである。久津川古墳群では集成編年3期後半に埴輪の樹立が認められるようになるが、西山古墳群周辺の久世支群では中期以降の資料しか知られていない。当地域において最古級の古墳の周辺に後世に周辺埋葬が認められることは、西山1号墳が中期になっても意識されていたことを示しており、示唆的な事例である。

以上のように、これまでのこれまでの見解よりも西山古墳群の時期が大きく遡ることが明らかとなった。中期に畿内屈指の大規模古墳群築造の素地となった前期の久津川古墳群の位置づけは極めて重要である。この問題に関しては大方の批判を得て再論することにした。 (桐井)



第16図 木津川右岸における古墳の編年（案）

5 結語

本論では、これまで知られていなかった資料を中心に、西山古墳群出土遺物の再検討を行った。その結果、西山古墳群は前期前半に始まる古墳群であることが判明し、久津川古墳群の成立を考える上で極めて大きな位置を占めることが明らかとなった。しかし、本論では各個別の遺物の図化及び検討に大半の紙幅を割き、それらを総合し、古墳群じたいの位置づけを十分に行うことができなかった。当地域では、新名神高速道路の建設工事に伴い、芝山遺跡で新たに小規模な前期古墳が検出されるなど、資料が充実しつつある。これらの小規模墳を含め、南山城における古墳の動向をとらえていくことが今後求められる。積み残した課題は大きいですが、今後の課題として、本論を終えたい。

本論をなすにあたり、同志社大学歴史資料館の若林邦彦先生には資料の検討の機会をいただいた。筆者らの怠惰から約1年にわたり、若林先生の手を煩わせることとなったことに、お詫びと感謝を申し上げたい。また、以下の方々には多くの教示を得、また資料の見学でお世話になった。末筆ながら感謝申し上げる。犬持雅哉、上田直弥、大高義寛、春日宇光、小泉裕司、下垣仁志、鈴木崇司、二村真司、浜中邦弘、福家恭、ライアン・ジョセフ
南丹市立文化博物館、長岡京市埋蔵文化財センター

註

- 1) なお、実測・製図等の実作業の分担は以下の通りである。
土器：桐井、埴輪：北山・桐井、銅製品：菊池、鉄製品：繰納・菊池
- 2) なお、保存が決まっていた7号墳に関しては、未調査のまま破壊され、現在古墳群の詳細な情報を知るすべは残されていない。
- 3) 本報告では、棺身を棺専用として製作した埴製の特製棺を「円筒棺」、樹立埴輪や同等の埴輪を棺としたものを「埴輪棺」と呼称する。
- 4) 類似した突出部は柳葉式銅鏃にもみられ、関部のS字状のカーブが刃部付近で腸袂状に短く屈曲するものが天理市東大寺山古墳で出土している。しかし、これらと西山2号墳出土銅鏃の突出部を比較すると、西山2号墳出土銅鏃の突出部はより茎に近い位置に存在しており、突出部と関部のラインが作る角度も直角に近くより急であるため、これらは異なるものとして区別できる。東大寺山古墳出土柳葉式銅鏃にみられた関部先端を腸袂状に短く屈曲させる形状は、定型的な柳葉式銅鏃の関部がもつS字状カーブが変容する過程で生み出されたものと考えられる。
- 5) 3A式と3B式の成立の先後関係は型式学的には不明であるが、出土する古墳の年代からは3B式の方が先に成立した可能性がある。
- 6) 池淵俊一は、元稻荷古墳出土銅鏃を丹後・但馬に地方に分布する関部が明瞭でない柳葉式銅鏃の一群と、無茎銅鏃を組み合わせることで創出された型式としている（池淵2002）。無茎銅鏃の再検討を含め、1A式の成立に関しては稿を改めて論じたい。
- 7) 同志社大学歴史資料館では、第1群～第3群の資料が、それぞれ「針状鉄器①～③」と注記され、保管されている。第1群は、第2・3群と比較して保管されている破片数が極めて少なく、「9cm×3本分」には復元できない状況にある。
- 8) 発掘調査時の記録（堅田・白石1962）には、「この矢を納めた鞞と考えられる塗漆繊維製品」が出土したと記載されているが、現在本資料の所在は確認できていない。
- 9) 魚津編年 i・ii 期に該当する針のうち、芝ヶ原12号墳、雪野山古墳、国森古墳では、小型ヤスが供伴している。小型ヤスは径が短く、断面形が円形であるため、上記の古墳の「針」は、ヤスの細片を一部誤認している可能性も存在する。
- 10) 類例として、国森古墳例（有稜系定角式30点・平根系定角・方頭式10点出土）、北広島町中出勝負峠8号墳例（有稜系定角式12点出土）、庄原市大迫山古墳例（有稜系定角式28点・銅鏃6点出土）など、瀬戸内地域の事例が多く挙げられる。共伴する折り曲げ鉄剣が出土する古墳は、弥生時代から古墳時代初頭にかけては九州北部・瀬戸内・丹後地域に濃密に分布することが指適されており（清家2002）、東瀬の鉄製武器は全体として、瀬戸内地域と近似した組成を持つといえる。

参考文献

- 池淵俊一 2002「神原神社古墳出土鑿頭式鉄鏃に関する試論」『神原神社古墳』加茂町教育委員会
- 石崎善久編 2015『乙訓古墳群』京都府教育委員会
- 岩本 崇編 2018『前期古墳編年を再考する』中四国前方後円墳研究会
- 魚津知克 2000「鉄製農工具副葬についての試論」『表象としての鉄器副葬』第7回鉄器文化研究集会発表資料集鉄器文化研究会
- 魚津知克 2003「曲刃鎌とU字形鍬鋤先－「農具の画期」の再検討－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所
- 魚津知克 2019「鉄製農工具副葬における前期と中期とのはざま」『鳥居前古墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第54集 大山崎町教育委員会
- 宇野隆志 2017「京都盆地における古墳と集落の動態」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館
- 大賀克彦 2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 福井県清水町教育委員会
- 大賀克彦 2013「前期古墳の築造状況とその画期」『前期古墳からみた播磨』第13回播磨考古学研究集会の記録、播磨考古学研究集会
- 春日宇光 2013「同志社大学所蔵城陽市西山2号墳出土資料調査報告 武器・農工具を中心として」『同志社大学歴史資料館館報』第16号 同志社大学歴史資料館
- 堅田直・白石太一郎 1962「京都府西山第1号、第2号、第5号墳発掘調査概報」『先史学研究』4号、同志社大学先史学研究室
- 鐘方正樹 2005「玉手山古墳群の研究成果と諸問題」『玉手山古墳群の研究V－総括編－』柏原市教育委員会
- 川口修実 2000「畿内における埴輪棺の展開についての一試論」『古代学研究』149号、古代学研究会
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会
- 川畑 純 2009「前・中期古墳副葬鏃の変遷とその意義」『史林』92巻2号 史学研究会
- 川西宏幸 1990「儀仗の矢鏃—古墳時代開始論として」『考古学雑誌』第76巻第2号、日本考古学会
- 京都大学考古学研究会 1961「西山古墳第4号墳発掘調査概報」『第一トレンチ』京都大学考古学研究会会誌
- 桐井理揮 2019「宇治市一本松古墳の埴輪とその年代」『京都府埋蔵文化財情報』第137号、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小泉裕司ほか 1999「西山古墳群」『城陽市史』第3巻、城陽市史編さん委員会
- 清家 章 1999「古墳時代周辺埋葬考－畿内の埴輪棺を中心に－」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
- 清家 章 2002「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」『待兼山論叢』第36号、大阪大学大学院大学研究科
- 高田浩司 2001「弥生時代銅鏃の二つの性格とその特質－石鏃・鉄鏃との比較を通じて－」『考古学研究』第47号第4号、考古学研究会
- 高田健一 2013「銅鏃」『古墳時代の考古学』4 副葬品の型式と編年、同成社
- 高田健一 2019「有樋篋被柳葉式銅鏃の新例」『古代学研究』第223号、古代学研究会
- 高野（野々口）陽子 1996「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第3集、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 高野陽子 2003「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『佐山遺跡』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊達宗泰 1961「奈良市山陵町出土円筒棺－付・法蓮町天満谷出土円筒棺－」『奈良県文化財調査報告』第4集、奈良県教育委員会
- 堤圭三郎 1964「西山古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1964、京都府教育委員会
- 同志社大学考古学研究会 1962「山城久津川古墳群の研究」『同志社考古』第2号、同志社大学考古学研究会
- 南部裕樹 2014「元稻荷古墳の銅鏃をめぐって」『元稻荷古墳』向日市埋蔵文化財調査報告書第101集、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 西村 歩 2008「中河内地域の古式土師器と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉』香芝市教育委員会、香芝市二上山博物館

- 橋本博文 1980「円筒棺と埴輪棺」『古代探叢－滝口宏先生古稀記念考古学論集－』滝口宏先生古稀記念考古学論集、滝口宏先生古稀記念考古学論刊行委員会
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社
- 福永伸哉 2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 松木武彦 1991「前期古墳副葬鉄の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号、考古学研究会
- 松木武彦 1992「銅鏃の終焉－長法寺南原古墳出土の銅鏃をめぐって」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊、大阪大学南原古墳調査団
- 松木武彦 1996「前期古墳副葬鉄の成立過程と構成－雪野山古墳出土の鉄・銅鏃の検討によせて－」『雪野山古墳の研究』考察篇 雪野山古墳発掘調査団
- 水野敏典 2018「黒塚古墳出土武器をめぐる諸問題」『黒塚古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第13冊、八木書店
- 米田敏幸 1991「土師器」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器、雄山閣
- ライアン・ジョセフ 2019「古墳出現期の瀬戸内における鉄鏃の生産と流通－浦間茶臼山古墳出土鉄鏃を中心に－」『古代吉備』第30集 古代吉備研究会
- 和田晴吾 1988「南山城の古墳－その概要と現状－」『京都地域研究』第4号、立命館大学 人文科学研究所

図の出典（特に注記のないものは、筆者らが作成、実測・製図、撮影）

- 第1図 小泉 1999を改変
- 第4図 芝ヶ原古墳：小泉裕司ほか編 2016『芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書』城陽市埋蔵文化財発掘調査報告書第68集、城陽市教育委員会 長池墳丘墓：小池 寛 2014「京都府南山城地域における古墳出現期の一様相」『京都府埋蔵文化財情報』第124号、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 椿井大塚山古墳：中島 正編 1999『椿井大塚山古墳』山城町埋蔵文化財発掘調査報告書21、山城町教育委員会
- 第7図 内田山B1号墳：筒井崇史 2000「内田山遺跡・内田山B1号墳」『京都府遺跡調査概報』第95集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 瓦谷遺跡26号埴輪棺：石井清司・有井広幸・伊賀高弘・筒井崇史・森島康雄 1997『瓦谷古墳群』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、金毘羅山古墳：松尾史子 2019「宇治市金毘羅山古墳出土円筒棺の修理復元について」『山城郷土資料館報』第26号、京都府立山城郷土資料館、犬木 努 2019「宇治市金毘羅山古墳出土の円筒棺について」『山城郷土資料館報』第26号、京都府立山城郷土資料館 狐谷横墓群：久保田健士1983「狐谷横穴群発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第8集、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 長法寺南原東3号墳：都出比呂志・福永伸哉編 1992『大阪大学文学部考古学研究報告2：長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊 長岡京市教育委員会第30冊別刷
- 第10図 1. 梅本康広編 2014『元稻荷古墳』向日市埋蔵文化財調査報告書第101集 向日市教育委員会を再トレースし改変。2. 鐘方 2005を再トレースし改変。6. 都出比呂志・福永伸哉編 1992『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊 長岡京市教育委員会編第30冊別刷を改変。7. 金関恕編 2010『東大寺山古墳の研究 初期ヤマト王権の対外交渉と地域間交流の考古学的研究』金関恕研究代表者科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書を再トレースし改変。3・4・5. 筆者作成。
- 第14・15図 小泉ほか 1999、春日 2013などから作成

